

# 下ノ原遺跡 川久保古墳

—茅野市長峰運動公園内埋蔵文化財調査報告書—

1 9 7 5

茅野市教育委員会

# 下ノ原遺跡 川久保古墳

—茅野市長峰運動公園内埋蔵文化財調査報告書—

1 9 7 5

茅野市教育委員会

## 序

茅野市においては、多年の懸案であった総合運動場の建設をすべく、玉川地籍の東海第三高校下から上川べりにかけて、330,000m<sup>2</sup>を買収して、茅野市長峰運動公園を建設することになった。

下ノ原遺跡は、この長峰運動公園の野球場建設の箇所であり、八ヶ岳西山麓の広大な裾野の末端部で、玉川荒神部落の西続きの平坦面にある。この地は古く開田の際などに土器・石器等が出土しており、また附近の畑からは表面採集もされていた。

そこで、茅野市教育委員会は、昭和49年8月から数回にわたって、実地踏査をし、市文化財審議委員会の議を経て、この下ノ原遺跡を発掘調査して、記録保存することにした。教育委員会は、この公園建設の主幹課である都市計画課から委託をうけて、下ノ原遺跡調査委員会を設置して、調査を実施することになった。

この遺跡の発掘作業は、昭和49年10月から12月にかけて行われ、その面積は4,200m<sup>2</sup>のほり、発見された遺構は住居址10基とピット16個所である。この遺跡は、縄文前期から中期・後期に至るまでの長期間に亘って古代人の生活の場であったことが判明した。

また、この下ノ原遺跡発掘調査中に、公園内道路開設の際、川久保古墳の位置が確認されたので、調査事業の一環として発掘調査をし、埋没保存が同時期に行われた。

発掘調査は、調査員河西清光・林 賢・宮坂光昭・宮坂虎次の四氏をはじめ、作業に従事された多くの方々、さらに出土品の整理復原をなされた宮坂篤夫・柳平嘉彦の両氏等に協力いただいた。これ等関係した各位に心から感謝を申し上げる。

この調査に、多額の費用を投じた上、調査完了まで野球場建設を延期され、文化財保護に理解をいただいた原田市長殿をはじめ関係者に深く敬意と謝意をささげる次第である。

この報告書が刊行されて、記録保存され、この土地に生活した古代人を偲ぶとともに、考古学会に少しでも裨益することが出来れば、望外の幸である。この報告を纏められたのは、下ノ原遺跡については考古館主事の宮坂虎次氏であり、川久保古墳は日本考古学協会会員である宮坂光昭氏であり、両氏の並々ならぬ尽力によるものであることをつけ加えさせていただきたいと思う。

昭和50年3月

茅野市教育長 木 川 千 年

# 目 次

序

目次

挿図目次

## 第1編 下ノ原遺跡

I. 位置および環境	3
II. 調査の概要	4
III. 遺 構	8
1. 住居址	8
2. 特殊遺構	13
IV. 遺 物	16
1. 土 器	16
2. 石 器	32
V. まとめ	41

## 第2編 川久保古墳

1. 発掘の経過	45
2. 墳 丘	46
3. 石 室	47
4. 副葬品	48
5. 考 察	49

図版

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 遺跡付近図 (50,000 分の 1)
- 第 2 図 地形図 (2,000 分の 1)
- 第 3 図 グリットおよび遺構配置図 (600 分の 1)
- 第 4 図 第 1 号住居址 (80 分の 1)
- 第 5 図 第 2 号住居址 (80 分の 1)
- 第 6 図 第 3 号住居址 (80 分の 1)
- 第 7 図 第 4 号住居址 (80 分の 1)
- 第 8 図 第 5 号住居址 (80 分の 1)
- 第 9 図 第 6 号住居址 (80 分の 1)
- 第 10 図 第 7 号住居址 (80 分の 1)
- 第 11 図 第 8 号住居址 (80 分の 1)
- 第 12 図 第 9 号住居址 (80 分の 1)
- 第 13 図 第 10 号住居址 (80 分の 1)
- 第 14 図 特殊遺構ピット (80 分の 1)
- 第 15 図 特殊遺構ピット (80 分の 1)
- 第 16 図 第 1 号・第 7 号住居址出土土器拓影及び実測図
- 第 17 図 前期末葉土器拓影
- 第 18 図 前期末葉土器拓影
- 第 19 図 第 2 号・第 3 号住居址出土土器拓影
- 第 20 図 第 3 号住居址出土土器実測図
- 第 21 図 第 4 号・第 5 号住居址出土土器拓影及び実測図
- 第 22 図 第 6 号住居址出土土器拓影
- 第 23 図 第 6 号住居址出土土器拓影
- 第 24 図 第 8 号・第 9 号・第 10 号出土土器拓影および実測図
- 第 25 図 第 10 号住居址出土土器実測図
- 第 26 図 第 10 号住居址出土土器実測図
- 第 27 図 第 10 号住居址出土土器実測図
- 第 28 図 縄文後期土器拓影
- 第 29 図 第 1 区・第 1 号・第 2 号住居址出土石器実測図
- 第 30 図 第 3 号・第 4 号住居址出土石器実測図
- 第 31 図 第 5 号・第 6 号住居址出土石器実測図

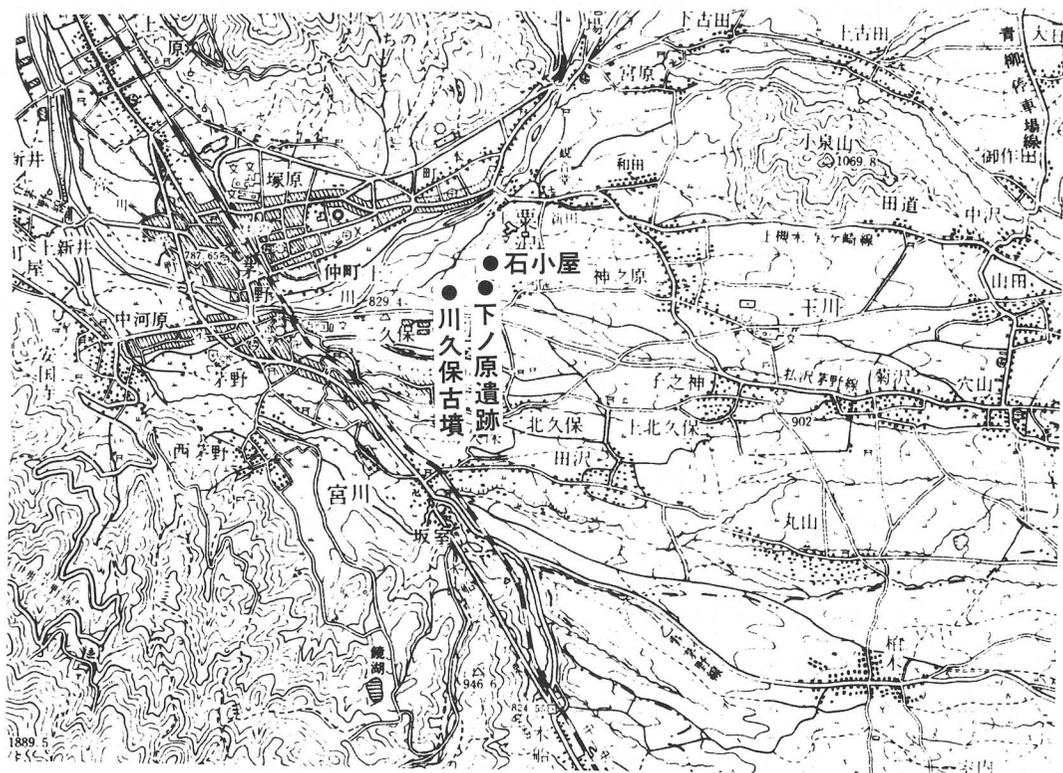
- 第32 図 第6号住居址出土石器実測図
- 第33 図 第8号・第9号・第10号出土石器実測図
- 第34 図 第10号住居址・第3区出土石器実測図
- 第35 図 第3区出土石器実測図
- 第36 図 石鏃・石匙・剥片石器実測図
- 第37 図 川久保古墳附近地形図
- 第38 図 川久保古墳石室実測図
- 第39 図 川久保古墳副葬品実測図
- 第40 図 湖盆東縁古墳群

# 第1編 下ノ原遺跡



# I 位置および環境

下ノ原遺跡は、長野県茅野市字荒神部落の西に位置する。この一帯は八ヶ岳西山麓に展開する広大な裾野の末端部に近く、南側を上川の一支流である川久保川が、北側を諏訪湖最大の流域をもつ上川が西流して、その間にははさまれた幅約600mと比較的広い台地である。この台地は二つの川の近接するにしたがって次第に狭くなり、遺跡西方650mの合流点において尽きる。台地上は東西に長いゆるやかな起伏があり、地形に即して低地は水田に、高台は畑として利用されている。そして南側平坦部に荒神の集落が立地し、その西の続きの平坦面が発掘区域である。



第1図 遺跡付近図 (50,000分の1)

川久保川の南は一段高い長峰台地で、川久保川浸蝕による谷を距てて、遺跡面との比高7mで対している。また上川は遺跡台地を浸蝕して、永明寺山との間に沖積地を形成する。上川面と遺跡台地との比高は約20mで、遺跡地の標高は828mである。遺跡は中央平坦面は畑で、南斜面は削平して水田となっており、古く、開田の際に遺物が出土したことが伝えられている。

台地南裾の川久保川畔の水田中に豊富な湧水がある。地元の人達から薬師清水または蛇清水と呼ばれているが、けだし、この清水が縄文時代生活の根拠となったものであろうか。しかし、今回発掘調査の区域は、この清水から約130mと離れている。

遺跡の南、長峰台地は、諏訪上社の御柱街道が通じ、また縄文中期遺跡として知られ、かつて諏訪清陵高等学校地歴部による発掘調査が行なわれたことがある。また荒神部落の東続きには中御前遺跡が立地し、更に上方の続き台地上に御前遺跡・藤塚遺跡・山田畑遺跡・一本木遺跡・中沢遺跡が点在する。昭和43年に緊急発掘調査した茅野和田遺跡は荒神南東約1kmに位置する。

諏訪史第一巻によると、荒神出土として土偶が記録されているが、今回発掘調査した下ノ原遺跡かどうかは明らかでない。

下ノ原遺跡の西方約400mに川久保古墳が位置する。この附近では川久保の谷は次第に深くなり更に西流して上川に流入し、台地もまた舌状を呈して尽きる。この舌状台地突端から約170m遡った川久保川に南面する斜面中段やや上に石室が構築されていた。川久保川との比高は約7mである。この古墳に対して長峰台地が目前を西走し、台地突端部に四ツ塚、南斜面に金鏝塚が位置する。また王経塚は上川と川久保川の合流点より約300m遡った上川北岸に立地する。

下ノ原遺跡の北側は浅い凹地をへだてて、小舌状台地が派生するが、この南斜面に小古墳があった。諏訪史第一巻による石小屋がそれであろう。大正7年に発掘して糸切底の須恵器が出土したと伝えられる。戦後にここを果樹園にするため、僅かに残っていた石室も根こそぎ撤去され、現在はその位置さえも不明確となってしまった。

## II 調査の概要

茅野市には、従来からスポーツ施設が少なく、社会体育行政を担当する教育委員会はもとより、一般市民からもその充実が望まれていた。このことから、茅野市教育委員会は、昭和46年3月に総合スポーツ公園調査研究委員会を設置して、市内数箇所候補地について検討を続けた結果、玉川地区荒神下の約330,000m<sup>2</sup>を茅野市総合スポーツ公園とすることに決定した。その後、事業は茅野市都市計画課の担当するところとなり、昭和49年11月29日に着工し昭和57年度完成を目標に工事が進められて今日に至っている。

下ノ原遺跡は、この用地内の東南端に位置し、またここが、昭和53年度に開催される国民体育大会軟式野球会場に予定されているところから工事が急がれていた。

そのため、教育委員会では、昭和49年8月から数度に亘り踏査を行ない、遺跡の範囲を明確にすると共に文化財審議委員会を開催して検討した結果、記録保存することに決定した。そして都市計画課と合議の上、調査費276万円にて教育委員会が委託を受け、下ノ原調査委員会を設置して調査を実施した。

### 《調査委員会役員構成》

委員長 小平実人 茅野市文化財審議委員長  
副委員長 土橋芳数 茅野市教育委員長

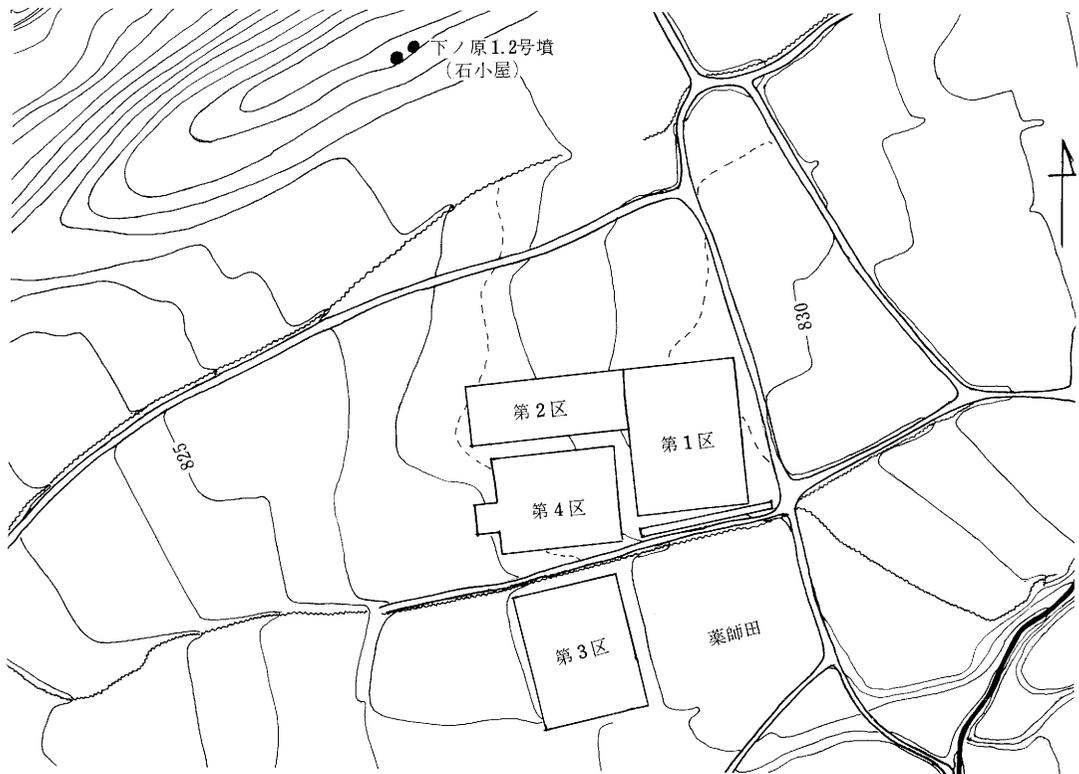
委 員	永 田 忠 次	茅野市議会社会文教委員長	
"	小 平 善 幸	茅野市教育委員長職務代理	
"	今 井 すみ江	茅野市文化財審議委員	
"	小 川 由加里	"	
"	宮 沢 伝	"	
"	茅 野 慶 次	"	
"	木 川 千 年	茅野市教育長	
"	両 角 甲	茅野市都市計画課長	
"	樋 口 義 久	茅野市財政課長	
調 査 員	河 西 清 光	岡谷東高等学校教諭	日本考古学協会員
"	林 賢	岡谷市文化財審議委員	"
"	宮 坂 光 昭	諏訪市文化財審議委員	"
"	宮 坂 虎 次	尖石考古館主事	"
事 務 局 長	木 川 千 年	教育長	
事 務 局 次 長	上 原 寛	教育次長	
事 務 局 係 長	矢 崎 久 治	社会教育係長	
事 務 局 員	長 田 篤	社会教育係	
"	岩 波 吉 春	"	
"	戸 田 外 史	"	
"	福 田 洋 子	"	
"	宮 坂 虎 次	尖石考古館主事	

発掘作業は、昭和49年10月8日に開始されて、12月21日に終了した。調査した面積は4,200m<sup>2</sup>で、発見された遺構は住居址10基とピット16個所である。

遺跡は、未買収の畑や水田があったため、発掘の順序にしたがって第1区・第2区・第3区・第4区とし、それぞれにグリットまたはトレンチを設定して作業を進めた。

#### 第1区

台地の南寄りの平坦面に南北に通ずる農道と、これに交差する東西の農道がある。この農道を境として東側は一段高い土手を築いて水田とし、南側はほぼ同じ平坦面の水田となっている。この交差点の角の畑を第1区とする。桑畑と、一部に水仙、野菜が栽培されていた。この畑は総合スポーツ公園敷地の東南端にあたる。最初、発掘区の南部分は作物が残っていたため、その収穫後に2m×36mの東西のトレンチを設定し、略々同時期の第2号住居址と第3号住居址を発見した。またグ



第2図 地形図 (2,000分の1)

リットの東北端から、前期初頭の第1号住居址と、やや西に離れて木島式土器破片を出土する生活面が発見された他は、発掘区中央部に住居址がなく、ピット6箇所と独立土器2個が発見されたのみである。

#### 第2区

買収の遅れた第4区の畑の北側で、第1区のグリットを延長して調査したが、遺構は全く存在せず、遺物も殆んど検出されなかった。

#### 第3区

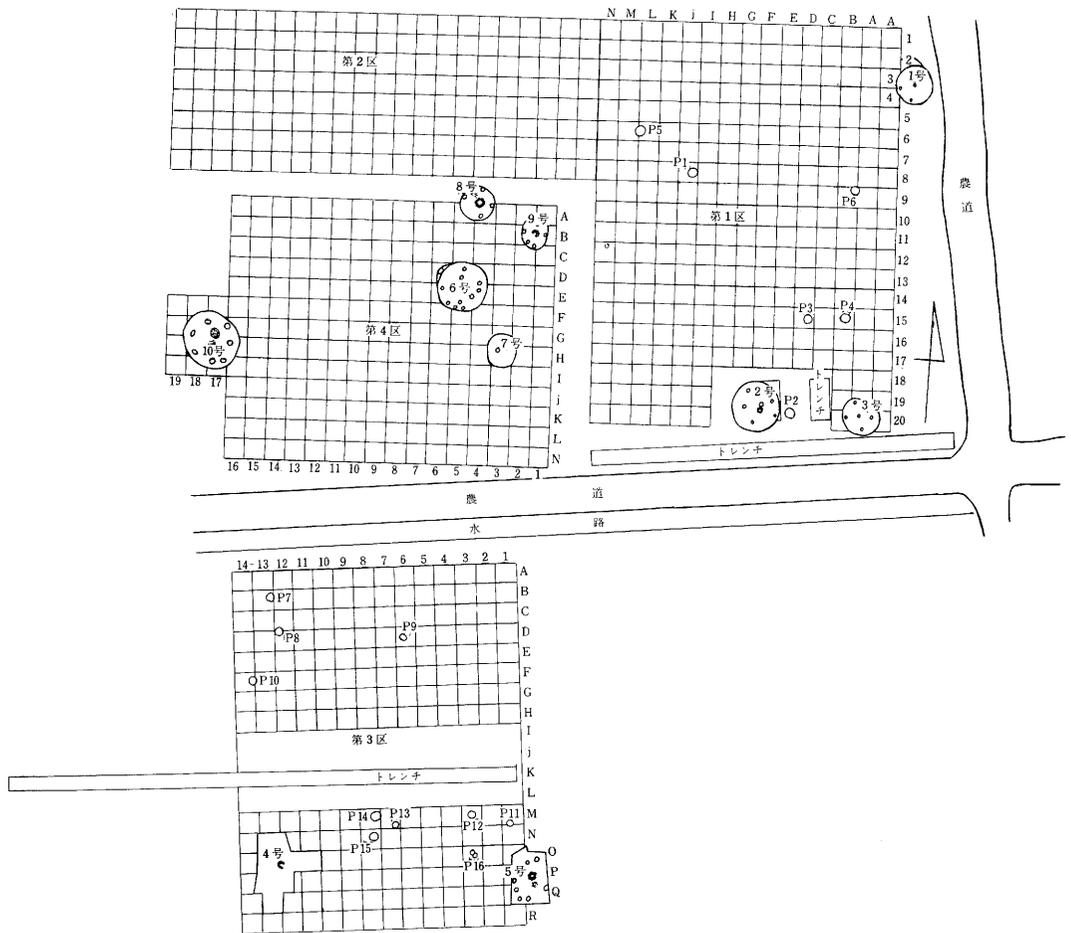
東西に通ずる農道の南側の水田である。3区の東は一枚の大きな水田で薬師田と呼ばれ、遺構の最も集中する区域と推定されるが、未買収のため調査の対象から除外された。現在も水田として耕作されている。

第3区は3段の水田で、このほぼ中央に2m×50mの東西のトレンチを設定し、地層および遺物出土状態を調べた上、東側2枚の水田を、ブルドーザーにより表土を排除したのちグリットを設定して調査した。地層は開田工事の際の削平と土盛り、その後の長年月の水田耕作により攪乱を受けていた。またもともと黒土層が深かったためか、遺構はローム層まで掘り込まれることなく構築されたようである。第4号・第5号の住居址と推定される2基の遺構とピット10箇所が発見されたのみである。総じて土器破片や石斧が黒土層下層から出土したが、打石斧の出土の多いことが特徴

的であった。

#### 第4区

セロリーが栽培されていて買収が遅れ、最後に残されていた畑である。セロリー栽培は土作りが最も大切とされ、また深耕を要するので、遺構が攪乱されているのではなかろうかと危惧されたが、黒土層が厚いためか、幸に第6号・7号・8号・9号・10号の5基の住居址を検出することができた。このうち7号住居址は花積下層の土器を出土した前期初頭の住居址で、他は中期の住居址である。6号・8号・9号共に褐色土層上部を床面とするもので、プランの検出が困難であった。また予想に反して住居址は発掘区の北に片寄って集中していた。



第3図 グリットおよび遺構配置図 (600分の1)

10月8日に鋤入式を挙げて調査を開始した本発掘は、第1区・2区・3区が11月14日に終了し、続いて19日より川久保古墳の調査に入り11月22日に終了した。その後、代替地のことから用地買収の進まなかった第4区が、12月に入りようやく解決し、栽培ハウスの撤去が行われたのち12月14日になって発掘が開始された。すでに隣接地では工事が始まり、加うるに寒気と降雪のため、

発掘作業は難渋したが、年末もおしつまった21日ようやく予定した全作業を完了することができた。この間、発掘作業に参加協力された下記の皆様に対し、心から感謝申し上げる次第である。なお出土品の整理復原は宮坂篤夫、柳平嘉彦両氏の手を煩わした。

藤森和助、田中文六、竹村良一、原田力、原田秀、原田はま子、原田七郎、牛山供吉、宮坂きよめ、田中君子、牛山はつみ、牛山けさみ、牛山ひでよ、牛山ます、両角一二三、牛山みつる、小林幸、牛山たてみ、両角きよえ、白川巴、白川康恵、鶴飼幸雄、宮坂篤夫、原田富貴雄、小林せき子、矢崎弥太郎、原田富一、柳平嘉彦、宮坂直、茅野高等学校地歴部

### III 遺 構

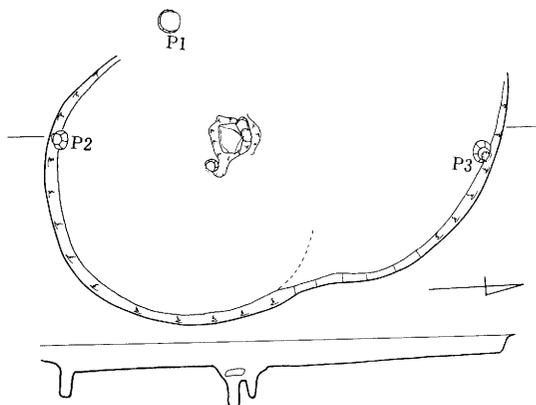
#### 1. 住 居 址

##### 第1号住居址

第1区東北端の農道沿いに位置する。A'-2はブルドーザーによる表土削除の際に若干の土器破片が検出されたグリットで、これをA'-3に拡張したところ、礫石と土器片の集積する箇所を発見し、更に東道路際まで拡張して調査した。

集石はローム面より20cm高い黒土層下層で、同一レベルにこの他4個の礫と焼土が遺存したが、遺構としては確認できなかった。

更に、この生活面の下約20cmのローム層直上から関西系と思われる薄手土器破片が出土したので、この面を周囲に追求したところ人頭大の石一個を配する地床炉を発見し、またここに一個体分の薄手土器破片が堆積していた。これを中心とした住居址で、平面形は円形、径3.3mであるが、北部分は不明確である。



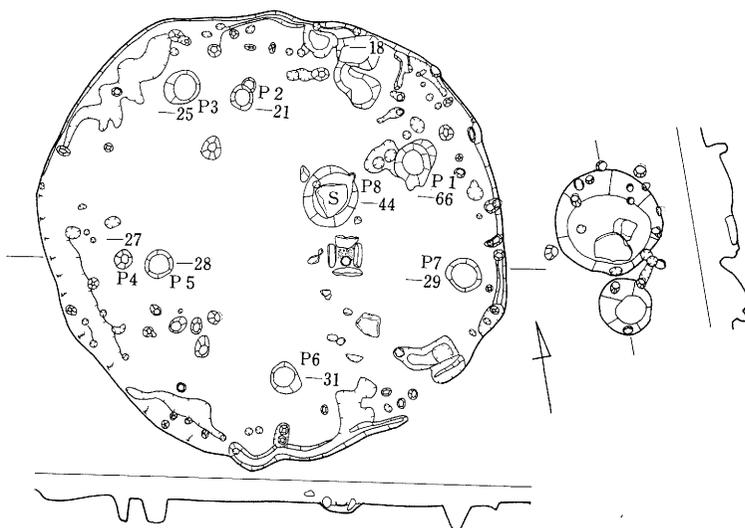
第4図 第1号住居址(80分の1)

床面は地床炉附近は比較的堅いが、ローム層への堀り込みが全くなされていないため、壁および柱址の検出が困難で、P1・P2・P3と、東および南側の壁のみが検出された。P1は深さ24cm、P2は深さ30cm、P3は斜孔で深さは24cmである。

地床炉の石を除去したところ、深さ45cm、35cmの2個の小孔があり、石の下から薄手土器1片が検出された。

### 第2号住居址

第1区南農道沿いに発見された。第3号住居址の西約6m離れて位置する。南北の径5m、東西の径4.8mのほぼ円形を呈する。床面は比較的堅く平であるが、西壁附近は若干傾斜する。ローム

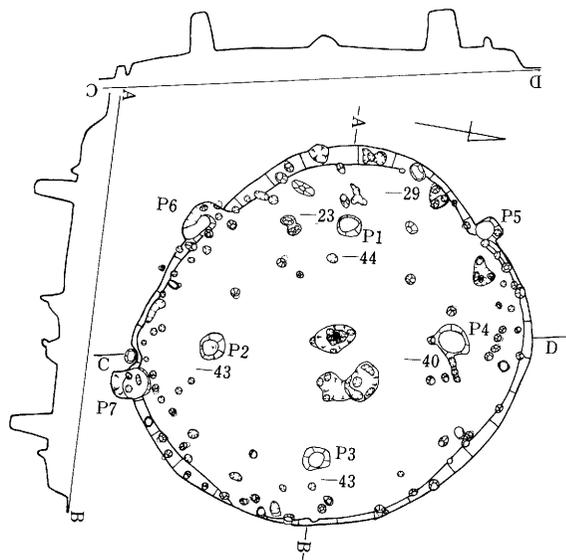


第5図 第2号住居址及びピット2号(80分の1)

層への掘り込みは浅く、壁の高さは10~15cmで斜傾する。周溝は幅も一様でなく、断続的に続き全周しない。周壁に斜傾する小孔が穿たれ、床面にも小孔が多い。床面のピットは多く、いずれを支柱址とするか決め難い。炉址は南東に偏り、径約40cmの小型方形石囲炉で、掘り込みは浅く床面から約10cmの深さである。炉内の北側に偏り土器の底部が遺存した。炉の北に径65cm、深さ44cmのピットがあり、底部に石が遺存した。貯蔵用のピットと思われる。土器は主として炉の周辺の覆土中から検出された。

### 第3号住居址

第2号住居址の東6m離れて発見された。4.1m×3.8mの楕円形を呈する。床面は堅く、周壁に近づくにしたがい僅かに上り勾配である。周壁は高さ20~30cmで全周し斜傾する。周溝はない。周壁には斜孔が等間隔に穿たれ、また壁裾から20~30cm離れて垂直な小孔が多い。炉址は住居址のほぼ中央に位置し、床面を掘り凹めて上半部のみ土器を埋めた埋甕炉である。炉の上に石があり、また床面各所に不規則に

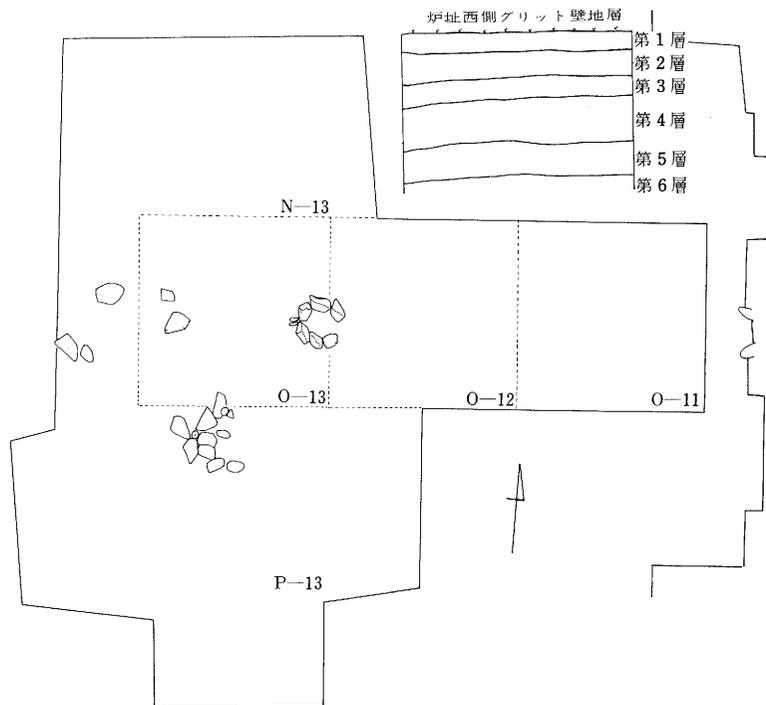


第6図 第3号住居址(80分の1)

数多くの礫石が遺存した。出土品は土器破片が床上覆土から、かなりの量が検出されたが、復原できたものは3点である。石器は磨石斧1、打石斧8、石匙1、石鋏3が出土した。

#### 第4号住居址

水田として耕作されていた、第3区南寄りに発見された石囲炉を中心とする遺構である。O-13の地表下100cmのやや褐色がかかった黒土層中に石囲炉を発見した。石囲炉は6箇の石をもって東

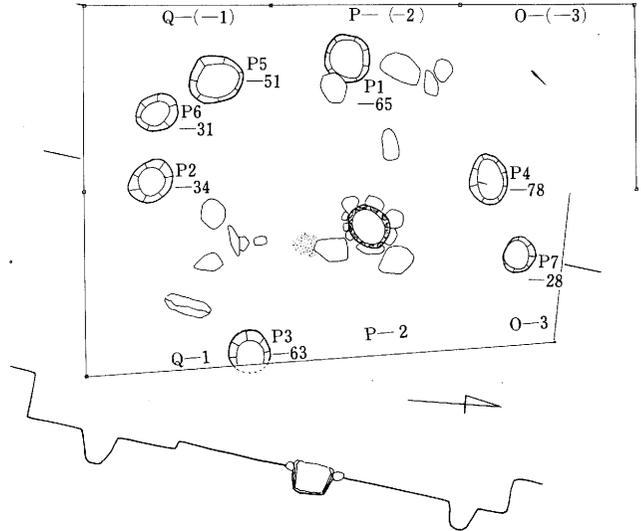


第7図 第4号住居址 (80分の1)

を開口して囲んだもので、炭層は混じていたが、焼土はみられなかった。この周囲を次第に拡張して、柱穴、周溝、周壁の発見につとめたが、黒土層中のため検出ができなかった。同一面からの土器破片の出土は比較的多く、打石斧の出土も多かった。この炉の南西約1mに、炉址面より約20cm深いレベルに集石があり、凹石1点が遺存した。この面も周囲に拡張したが、住居址として確認することが不可能であった。この区域は水田であったため、地層が他と若干異なり、第2層までは人為的なものである。即ち、第1層は20~30cmの厚さの黒色を呈する黒土層で、下層約10cmは稲の毛根に褐鉄鉱が沈澱附着して赤褐色を呈する。第2層は18~26cmで、水田造成の際の盛土で、やや褐色がかかった黒土層である。第3層は18~20cmの黒土層、第4層は50~60cmのやや褐色を帯びた亜黒土層、第5層は45~48cmの層厚の褐色土層で、第6層がローム層となる。石囲炉および集石は、第4層の中層から下層にかけて遺存した。

### 第5号住居址

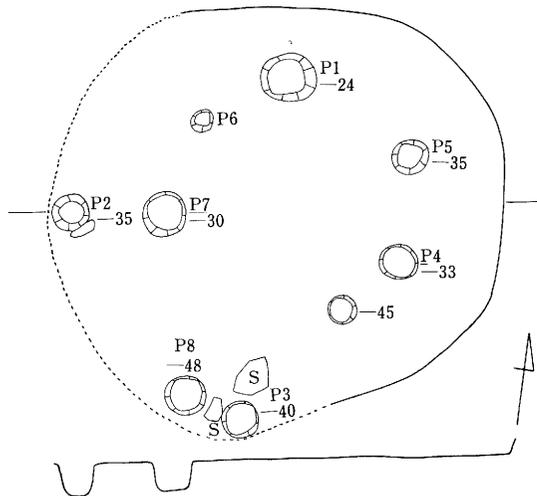
第3区の南側グリットの東端，東の水田の土手に接して発見された埋甕を中心とする遺構を第5号住居址とする。水田耕作面下40cmの深さ，ローム面より約10cm上層の褐色土層中に埋甕が発見され，同一レベルに焼土，配石等が遺存するが，床面は軟弱で，壁および周溝は確認できなかった。ピットは7箇所検出されたが，焼土を囲むP1・P2・P3・P4が4支柱址と推定される。



第8図 第5号住居址 (80分の1)

埋甕は43cm×47cmの楕円形に口縁部がゆがみ，頸部を9個の石で

囲んでいる。土器は上半部だけで高さ26cmである。石を除去して掘り下げたところ，埋甕の周囲は堅く赤土がつめられていた。焼土は埋甕の南60cmに，径30cmの範囲に堆積していたが，量は余り多くない。周辺からの石器の出土は多く，抉入部のある大型打石斧，半磨製石斧，異形大形石匙の他，打石斧6点が出土したが，土器は少なく，埋甕を除いては僅かな破片である。地層は，第1層が厚さ15cmの耕土層，第2層は褐鉄鉱の沈澱した厚さ7cmの赤褐色変色土層，第3層は約30cmの層厚の黒土層，第4層は15cmの褐色土層で，以下ローム層に移行する。埋甕は第4層面に遺存した。したがってピットの検出も困難で，P2・P5・P6はこのグリットをローム面まで掘り下げてようやく検出した。



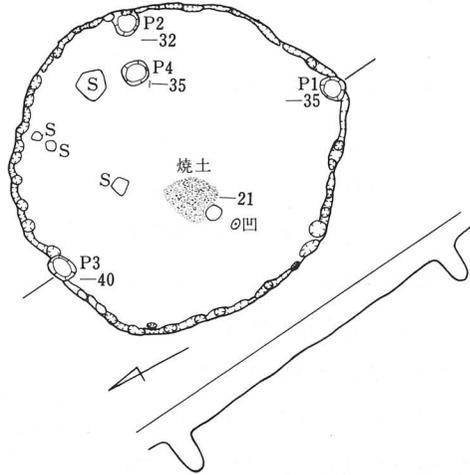
第9図 第6号住居址 (80分の1)

### 第6号住居址

第4区の中央，A-11より土器片が検出され，これを北に拡張したところ土器破片が堆積していたが，炉址も焼土もなく，柱址と推定されるピットのみが検出された。ローム面を床面とするが軟弱で，土器は主として中央の覆土中に堆積し，また磨石斧が縦につきささって出土した。ピットは9箇所検出されたが，位置および深さから，P1・P2・P3・P4の4支柱が想定され，P2・P3には壁に石が遺存した。

### 第7号住居址

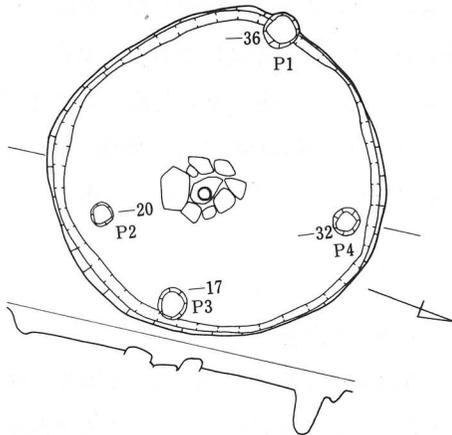
第4区のD-13に発見された住居址である。径3.5mのほぼ円形を呈するが、南側のP1の部分に僅かに張出す形状となっている。ローム面を床面とし、床面は堅いが余り平坦ではない。壁はないが、全周する周溝により住居址のプランが判明した。中央からやや西寄りに50cm四方に焼土が堆積し、径18cm、深さ10cmの小孔1個が検出され、この西の床面に凹石1点が遺存した。周溝は幅5cm~10cm、深さ7cm前後で全周し、周溝内に小孔が穿たれるが、規則的に明確には検出できなかった。ピットはP1・P2・P3・P4の4箇所検出されたが、柱穴と思われるものはP1・P2・P3で周溝に接して掘られている。焼土の近くの床面から僅かに浮いて花積下層式に比定される尖底深鉢3分の1個体分と、別個体の土器片が出土し、石器は石鏃2点と凹石1点だけである。



第10図 第7号住居址 (80分の1)

### 第8号住居址

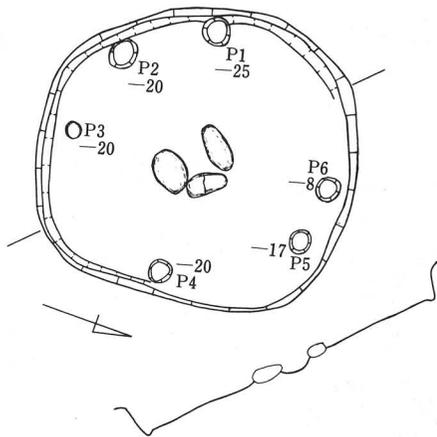
第4区の北寄りに位置し、第9号住居址と僅か西に3m離れている。地表下約30cmの黒土層中に石囲炉を発見して、これを中心に周囲に拡張したが、黒土層中の住居址のため壁は余り明確ではない。径3.5mの円形プランである。床面は軟弱で幅の広い周溝を全周し、柱穴は4支柱址である。炉址は8個の河原石を円形に囲んだ石囲炉で、炉底にも1個の石が置かれ、その上に土器1点が遺存した。



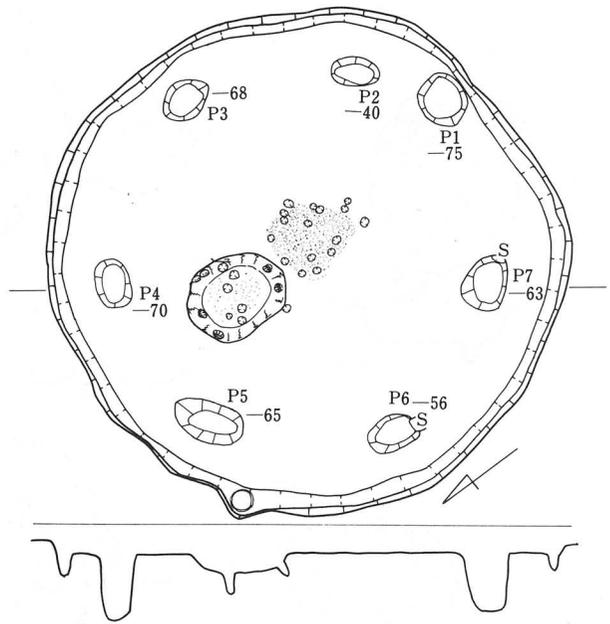
第11図 第8号住居址 (80分の1)

### 第9号住居址

第4区東北隅に位置する住居址で、地表下約30cmの褐色土層面に炉址が発見され、この炉を中心として拡張しプランの検出につとめたが、床面が褐色土層面で軟弱のため、柱址、周溝、周壁共に検出が困難であった。炉址を中心とした径3.5mの円形に近い隅丸方形の住居址とする。周溝は南西部分の過半分にめぐり、柱穴は6個であるがP1・P3・P4・P5の4支柱址と考えられる。炉址は3個の扁平な河原石で三方のみ囲んだ石囲炉で、炉址内部の焼土の堆積も少ない。炉址周辺に土器破片が若干堆積していたが、総体的に遺物の乏しい住居址である。



第12図 第9号住居址 (80分の1)



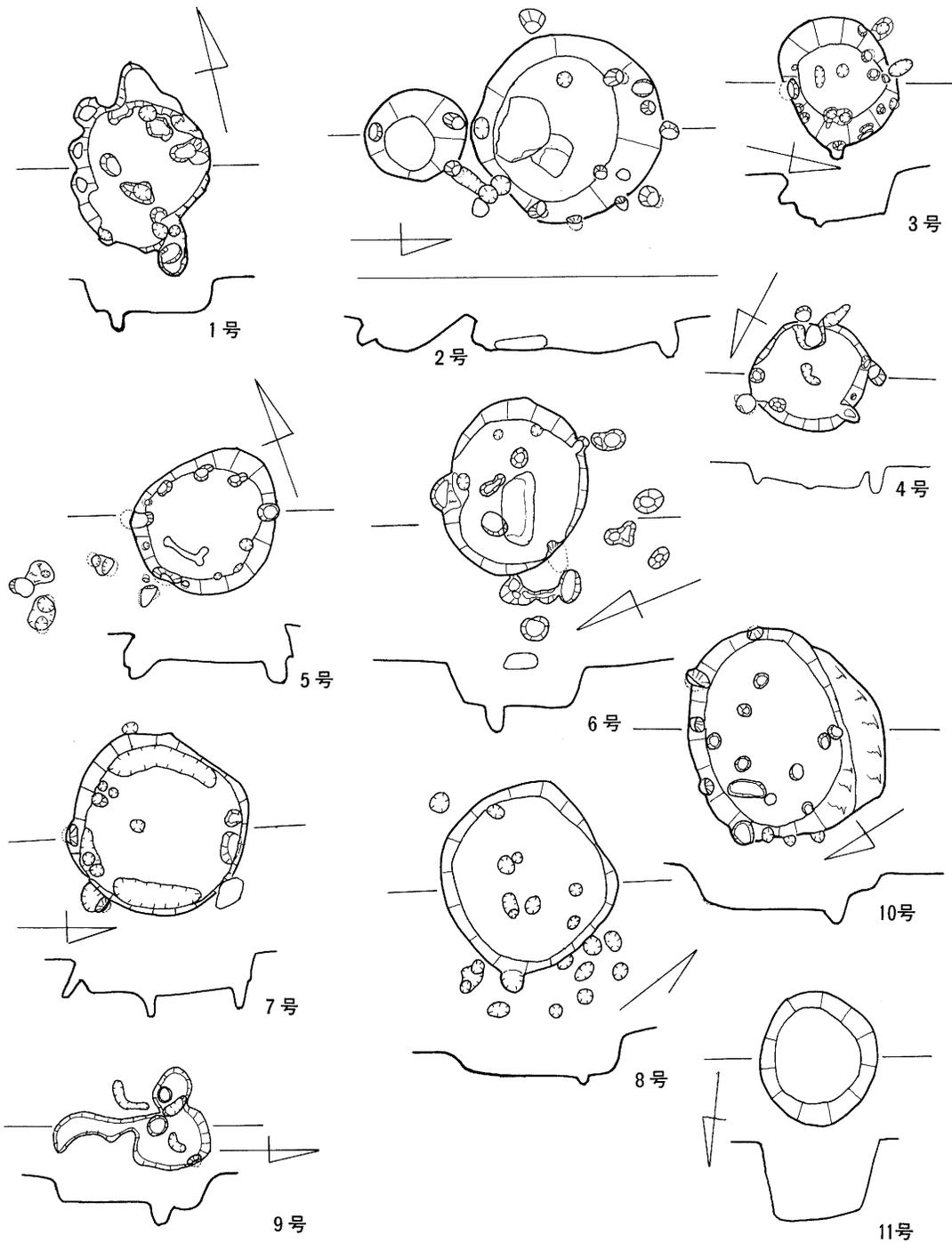
第13図 第10号住居址 (80分の1)

#### 第10号住居址

第4区西端に位置し、発掘最終日に発見された。経5.5mの円形プランの住居址である。床面は堅く平で、周壁、周溝は全周する。壁の高さは西側は緩傾斜する地形に即して低く5~9cmで、北壁および南壁は10~15cmである。周溝は幅広くかつ深く、最大幅は20cm、深さは13~18cmである。柱穴は、位置、形態および深さからP2・P3・P4・P5・P6・P7の6支柱址であろう。壁から20~30cm離れて等間隔に配列し、いずれも楕円形を呈する。P1は円形で周溝に接し、P1・P7の間を入口部とすれば、その右側に位置する。貯蔵庫的のピットであろうか。炉址は竪穴炉址で掘り込みが浅く、深さ19cmで皿状を呈し、炉底に小孔が5個、炉壁に斜孔が穿たれている。炉の南側に径5~10cm、深さ15~30cmの小孔16個が穿たれ、この部分の床面は赤く焼け、また焼土もかなりの量が堆積していた。周溝の北西部に壁を僅かに欠いて土器が1点埋められていた。炉の西側と、焼土東側の覆土から多量の土器が検出された。またP1の南の住居址外の堆土に直立土器1点が遺存した。

#### 2. 特殊遺構

住居址以外の、特殊な用途を有すると思われる小竪穴は、全部で16箇所発見された。これらの竪穴はローム層への掘り込みが比較的浅いものが多く、かつ、ローム層上層が、ローム塊が入り混じったような堆積状態を示すため、竪穴内に更に穿たれた小孔の検出が困難で、中には意図的に穿たれたものか、或は自然の黒土層の浸透によるものか判断に苦しむものもあった。次にこれら小竪穴



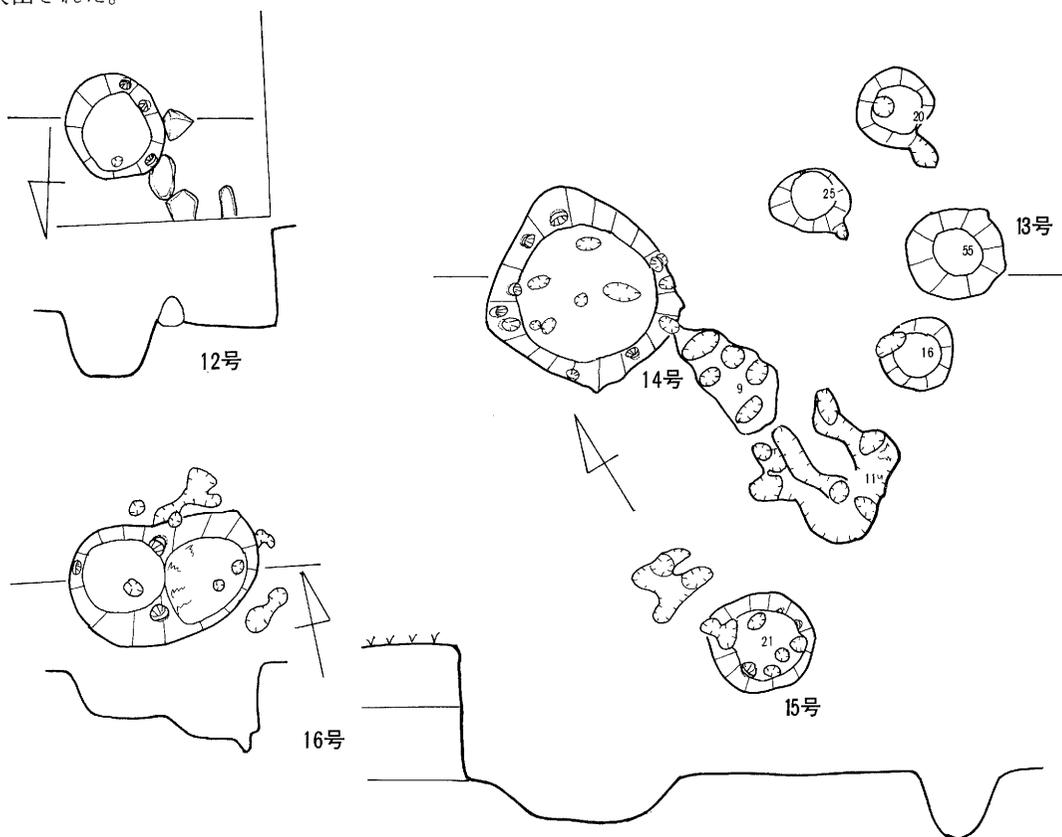
第14図 特殊遺構ピット (80分の1)

について簡単に説明を加えたい。

ピット1号 第1区J-8 東西経90cm, 南北径80cmの不整楕円形を呈し、深さ20cmのタ

ライ状で、底部に小孔を有する。南北に張り出し状の掘り込みがみられる。

ピット 2号 第2号住居址の東50cm 離れて位置する。大小2箇のピットで、大きい方は径110cm、深さ20cm、小さい方は径60cm、深さ20cmで、共に円形を呈する。大きいピットの底部には2箇の石が重なって遺存し、底部に小孔と、壁に斜孔が穿たれる。堆土より下島式土器破片が検出された。



第15図 特殊遺構ピット (80分の1)

ピット 3号 第1区D-15 77cm×63cmの不整楕円形を呈す。深さは25cm。壁は傾斜して底部はほぼ平で、底に小孔と壁に斜孔を有する。

ピット 4号 第1区F-15 65×75cmの不整円形を呈し、深さ8cmと極めて浅いピットである。皿状の形態で、底部、壁に不規則な小孔がある。

ピット 5号 第1区L・M-6 90×80cm、深さ18cmの不整円形を呈する。壁は横にひろがり、壁裾に小孔がある。

ピット 6号 第1区B-9 105×85cmの平面形楕円形を呈する。深さは26cmで、壁は傾斜し底部はほぼ平である。底部とピットの周辺に小孔がある。覆土上部に一個の河原石が遺存した。

ピット 7号 第3区A-13 径110cmのほぼ円型を呈し、深さは23cmで、壁は直壁である。覆土より下島式土器が検出され、壁上に小石が遺存した。壁裾に溝と小孔が穿たれている。

ピット8号 第3区D-12 110×98cmの楕円形を呈し、深さ24cmの皿状のピットである。底部およびピット東側に小孔が穿たれる。

ピット9号 第3区D-6 深さ14cmの不規則な形状を呈するピットで、人為的なものかどうか不明といわざるを得ない。

ピット10号 第3区F-12 長径96cm、深さ14cmの不整形のピットで、壁に斜孔、底に小孔が穿たれる。覆土中に土器上半部が遺存した。

ピット11号 第3区M-1 80×70cm、深さ45cm、平面形は楕円形を呈し、壁は直壁に近い。底部は平である。

ピット12号 第3区M-3 58cm×50cm、深さは36cmで壁は傾斜し、底部は平である。壁に斜孔と、底部に小孔が1個ある。壁際に石が4個遺存する。

ピット13・14・15号 第3区M-8、M-9に発見されたピット群で、この他に3個の小ピットと、不整形の掘り込みがある。ピット13は深さ55cm、径50cmの円形を呈し、隣接して3個の深さ16~25cmの浅いピットがある。ピット14は径95cm、深さ25cmの不整形隅丸四辺形で、底部は皿状を呈し、底部と壁に小孔を有す。ピット15は径55cm、深さ12cmの皿状を呈し底部に小孔を有する。ピット14の覆土から、下島式土器破片が検出された。

ピット16 第3区O-3 連続する2個のピットで、平面形は100cm×70cmの長楕円形を呈す。深さはそれぞれ25cmと30cm。壁は直壁に近く、底部に小孔がある。

## IV 遺物

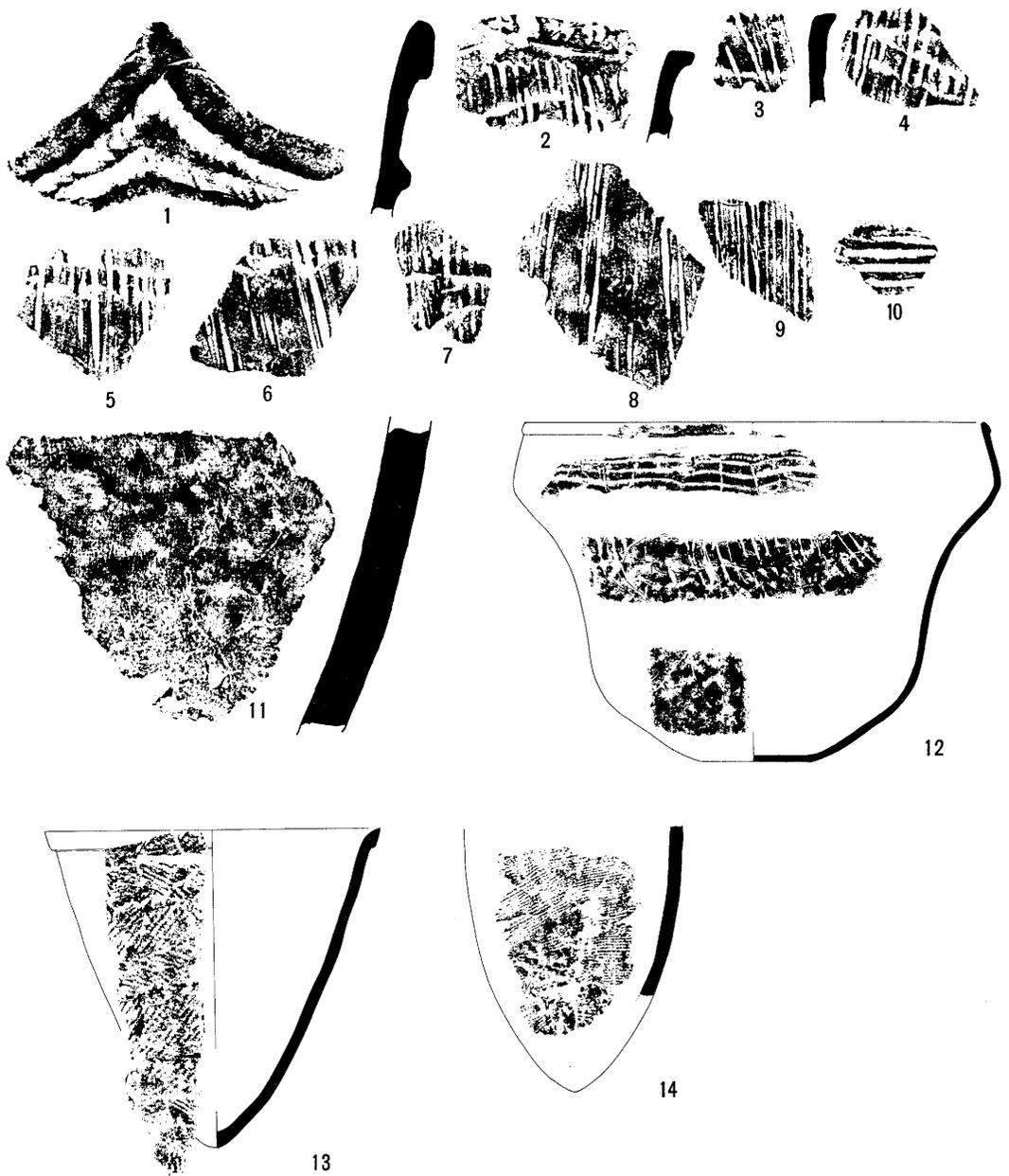
### 1. 土器

出土した土器は、前期初頭に編年される一群、前期末葉の下島式、中期の各形式、後期の堀之内式に比定されるものの四期に大別される。

#### (1) 前期初頭

##### 第1号住居址出土土器(第16図1・12)

1は地床炉の石の下から検出されたものである。山型の口縁部破片で、全体の器形は不明である。色調は灰褐色を呈し、細かな雲母粒を僅かに含み、焼成は堅緻である。炭化物を付着する。厚さは5mm。口縁部に沿って二条の三角形刺突陰刻文を深く施文し、このために幅1.2cmの複合口縁の様な状態を呈している。この下が再び隆帯と刺突の文様帯となる。12は住居址焼土上に堆積して出土したものである。推定復原口径39cm、高さ26cm、口頸部の内曲する鉢型土器である。厚さ5mmで、色調は灰褐色乃至黄褐色を呈し、焼成は良好である。複合口縁で、この下に半割竹管による連続刺突文が1条と、浅くてやや太い平行沈線が施文される。また外曲する胴部に篋状工具に



第16図 第1号・第7号住居址出土土器（1～11-2分の1，12～14-3分の1）

よる斜行平行沈線が付される。胴部以下は無文である。

C-3・4，D-3・4 グリット出土土器（第16図2～11）

第1号住居址の西約6m離れて、褐色土層面に焼土の堆積があり、この周囲から検出された土器片である。2~9は、灰褐色または明るい褐色を呈し、木島式に比定される細線文指痕土器の一群である。2・3は口縁部破片。2は厚さ4mm、焼成は堅い。口唇に筒状の竹管により押し引いたと思われる引掻文があり、このために押しつぶされて、隆帯の如き状態を呈する。これに半割竹管による斜行平行条線がつけられるが、波状に貼付された細い粘土紐を同時に押し引いている。内面には指痕が著しい。3は口唇に2条の引掻状細線がみられ、器面に鋭く細い斜行沈線文が施文される。4~8は胴部破片で雲母を僅かに含み、厚さは2~3mmと極めて薄く、内面に指痕の凹凸が著しい。貼付された粘土紐は、細線文押し引きのために扁平につぶれている。10は明るい褐色を呈し、器厚はやや厚く6mmで、焼成も良い。横走る貝殻条痕文が施文される。11は厚さ12mmの含繊維無土器破片で、色調は黒褐色を呈し、繊維の含有はそれ程多くない。焼成も比較的よい。

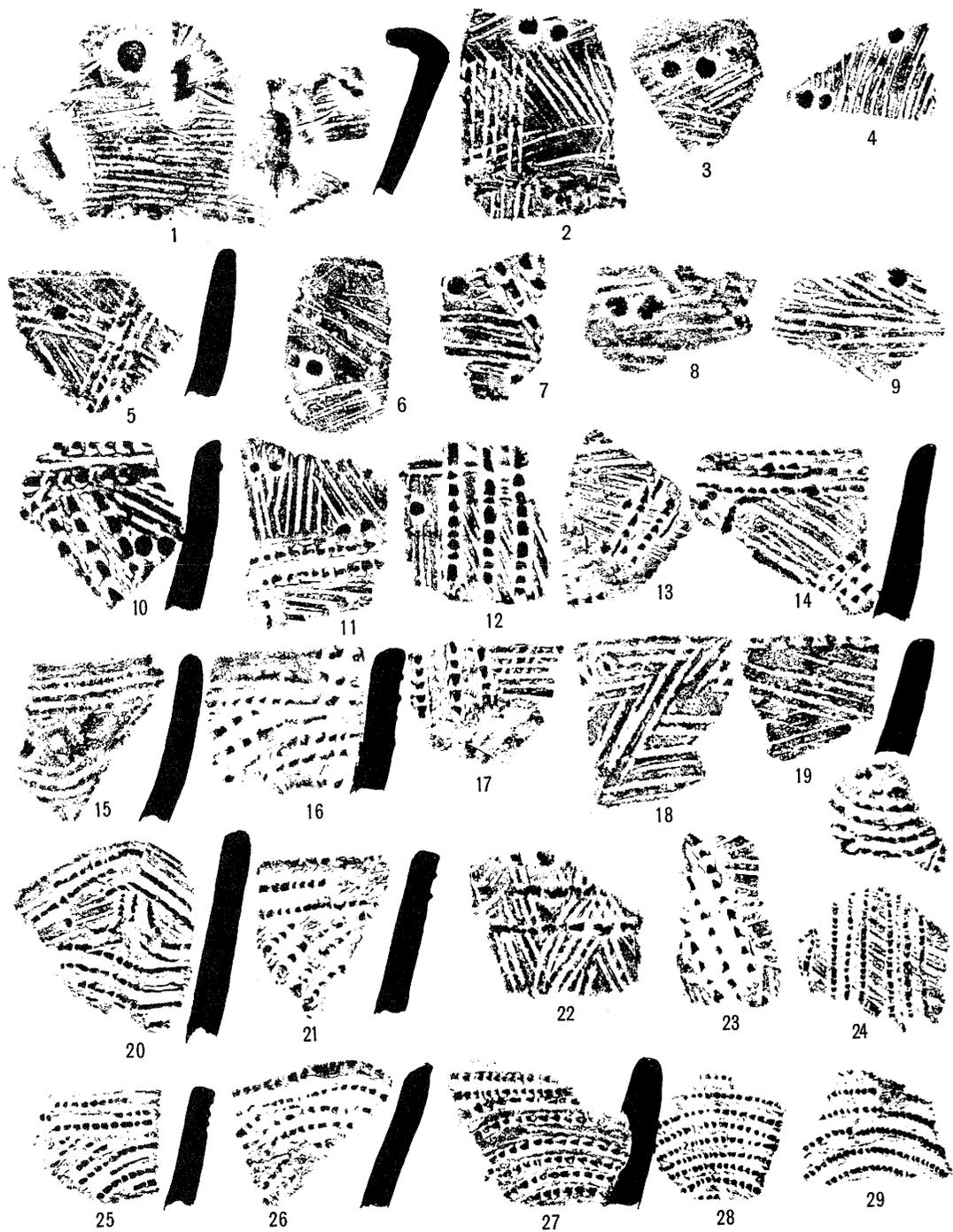
#### 第7号住居址出土土器（第16図13・14）

第7号住居址からは土器はこの2点以外には小破片も検出されなかった。13は床面に密着して出土した。複合口縁の尖底深鉢土器で、口径30cm、高さ28.8cmである。繊維を多量に含有し、特に器内面に繊維痕の空隙が著しい。器厚は10mmで、黒褐色を呈し、焼成はもろい。複合の口縁部から底部まで、粗い単節羽状縄文が施文されている。尖底は僅かに丸みを帯び、胴部はゆるく内弯している。14は破片から器形を推定したが、13と同じ尖底土器と推定される。明るい褐色を呈し、繊維をかなり含有するが、焼成は比較的よい方である。厚さ12mmで、単節の斜縄文が施文される。

#### （2） 前期末葉（第17図・18図）

1区・3区・4区の各グリットから散発的に検出されたが、特に第2区の道沿いのトレンチ附近が多かった。下島式土器として分類されるもので168片が出土した。

1~31は竹管による条線文を地文とし、これにボタン状突起や結節状浮線文の貼付された土器である。1は内屈する口縁部破片で、内面は明るい黄褐色を呈し、赤色塗料を施した痕跡がみられる。内屈する口縁にやや大きめのボタン状突起を付し、屈曲部から下にかけて、平面形が紡錘形の稜線のとがった突起が貼付される。2・5は器面に直接に竹管結節状文が施されている。10~27・22・23は太めの結節状浮線文で、浮線は多くは直線的である。20・25~31は繊細な結節状浮線文で、器面に直接に結節状沈線文を施文したもので、34・35・36は弧状に密に施文する。37~43は沈線文、44は篋切浮線文土器である。



第 17 図 前期末葉土器拓影 (2 分の 1)



第18図 前期末葉土器拓影（2分の1）

### （3） 中 期

#### 第2号住居址出土土器（第19図1～20）

完形品は出土しなかった。1は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含み焼成は余り良くない。隆線と連続刺突文により文様を構成する。2～6は隆線とこれに沿う連続爪形文、三角形刺突文により文様を構成したもの。8・9は同一器体破片で、黒褐色を呈し、隆線による区画内に、列点状連続刺突文を充填する。7は輪積みの痕跡を残す無文土器。11・12は口縁部破片で、口縁に半割竹管による三条の平行浮線文を施文して、その下に三角形の刺突文が押捺される。13～18は胎土に雲母を含み、斜縄文と平行沈線文の施文されたもの、19・20は半割竹管による平行沈線文土器である。

#### 第3号住居址出土土器（第19図21～24、第20図）

ほぼ復原されたものが3点ある。拓影21は灰褐色を呈し雲母および石英粒を含有する。22は赤褐色を呈する厚手の土器で隆帯上にも斜縄文が押捺される。23はその胴部破片。24は環状把手がつけられている。第20図1は暗褐色を呈し、焼成は良い。口縁の外傾する筒形土器で、隆帯による区画内を爪形文、三角形刺突文を充填して文様を構成する。2は黒褐色乃至赤褐色を呈し、白い砂粒を含み焼成は余り良くない。口縁部の4個所に対称的に突起を付し、連続刺突文による文様帯は口縁部にかざられ、胴部にはみみず状の浮隆文を貼付する。

#### 第4号住居址出土土器（第21図1～10）

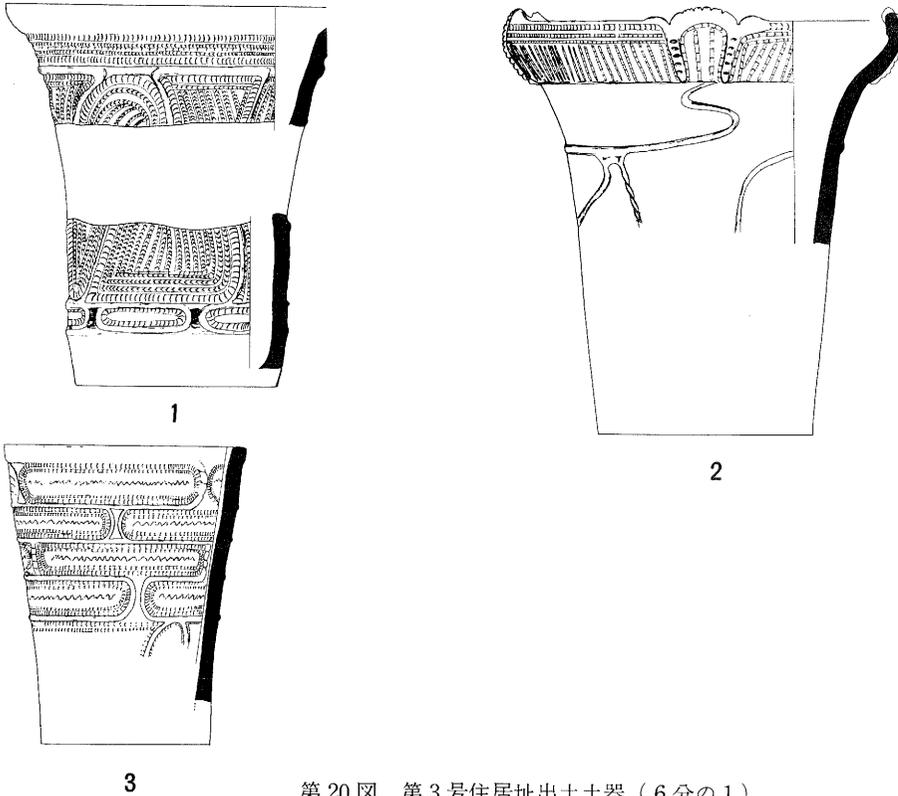
石囲炉を中心とした周辺から検出されたもので、1～5は炉址面下層から、6～10は炉址面から出土した。前者は中期最盛期、後者は中期後半に編年されるものである。

#### 第5号住居址出土土器（第21図11～14）

14は石に囲まれた埋葬である。胴下半分を欠損する。色調は明るい褐色を呈し、焼成は普通。口



第19図 第2号・第3号住居址出土土器（3分の1）



第20図 第3号住居址出土土器（6分の1）

径 37.8cm, 現高 25.5cm。口縁部は内湾し, 4条の波状粘土紐を貼付して加飾する。頸部の隆帯から5箇所に粘土紐文を下垂する。

第6号住居址出土土器（第22図, 第23図1~20）

完形のものではなく, 1・5・13がほぼ器形の推定できるものである。21~26は第6号住居址の南側の褐色土層面からまとまって出土したものである。

第8号・第9号住居址出土土器（第24図1~11）

第8号・第9号共に遺物は乏しく, 1~6が第9号より, 7~11が第10号より検出された。

第10号住居址出土土器（第24図12~20, 第25図, 第26図）

住居址覆土中より多量の土器が出土した。器形の推定できるものは図示した14点である。第24図18・20は小型の台付土器, 19は小型深鉢である。第25図1は胴部の片側のみに縦に長い環状の把手を加飾している。4・8は大型の貯蔵形態の土器である。5は対称的に立体的の把手を加飾した深鉢で中期末葉前半の加曽利1式に比定される典型的な装飾土器である。6は口縁部に波状渦巻文の粘土紐を貼付した浅鉢。7・9は全面に粘土紐文を貼付加飾した同形態の甕型土器で, 9の胴部には繊細な縦糸文が施文されている。10・11は小型深鉢, 12は小型広口甕形土器, 13は環状把手付の無文土器である。

独立土器（第26図14，第27図）

14は第10号住居址の北西部の壁を欠いてローム層中に埋められていた。口縁部も底脚部も欠除する。粗雑な作りで胴下半の器面は赤褐色を呈し凹凸が多い。

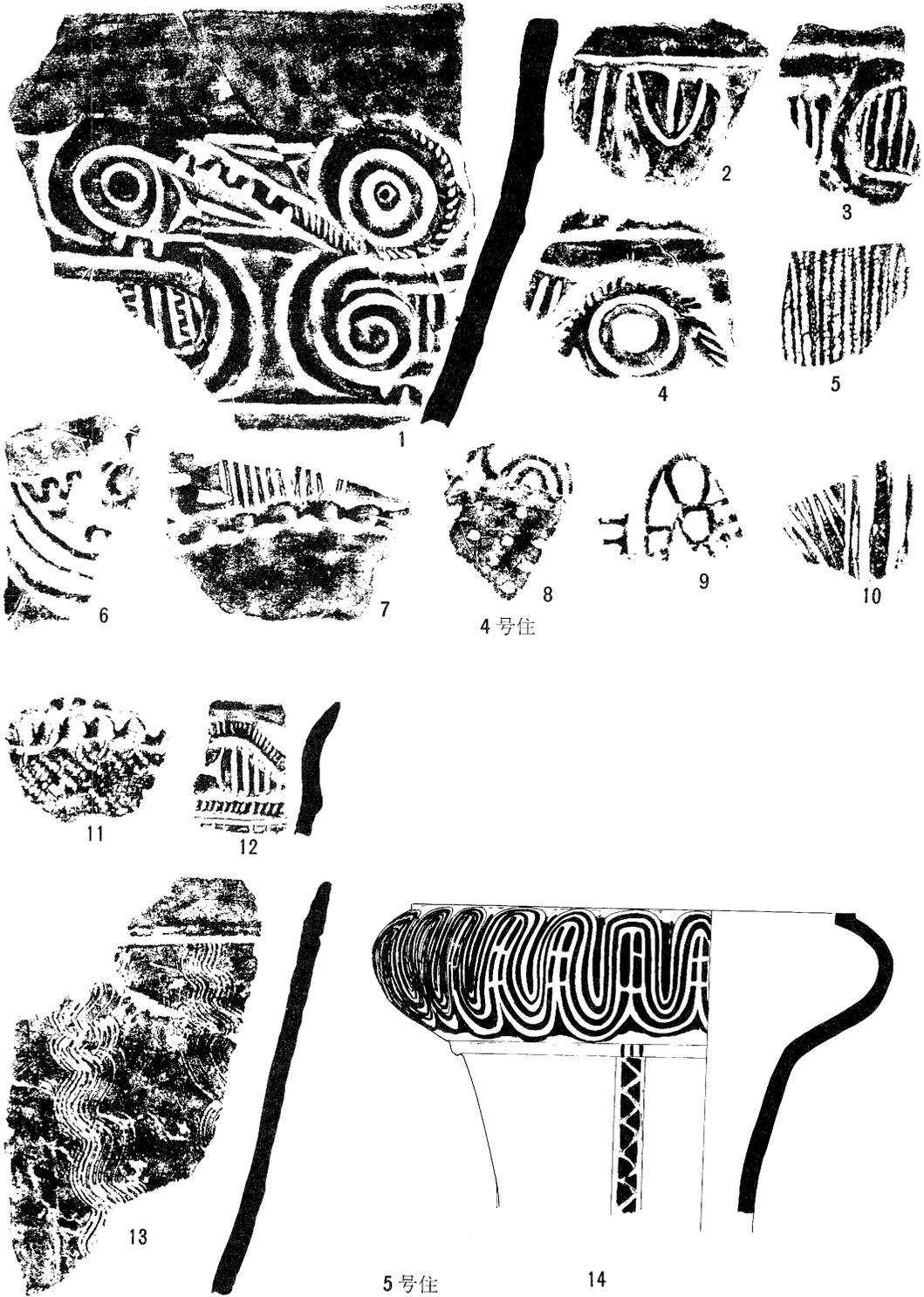
第27図1は10号ピット内に遺存した土器で胴部下半を欠き、口縁部を粘土紐と、これに沿う爪型連続刺突文により文様を構成する。

2は第3区のF-4グリット出土の独立土器，3は第1区のN-12の褐色土中に直立して発見された土器で，略々完形に復原された。

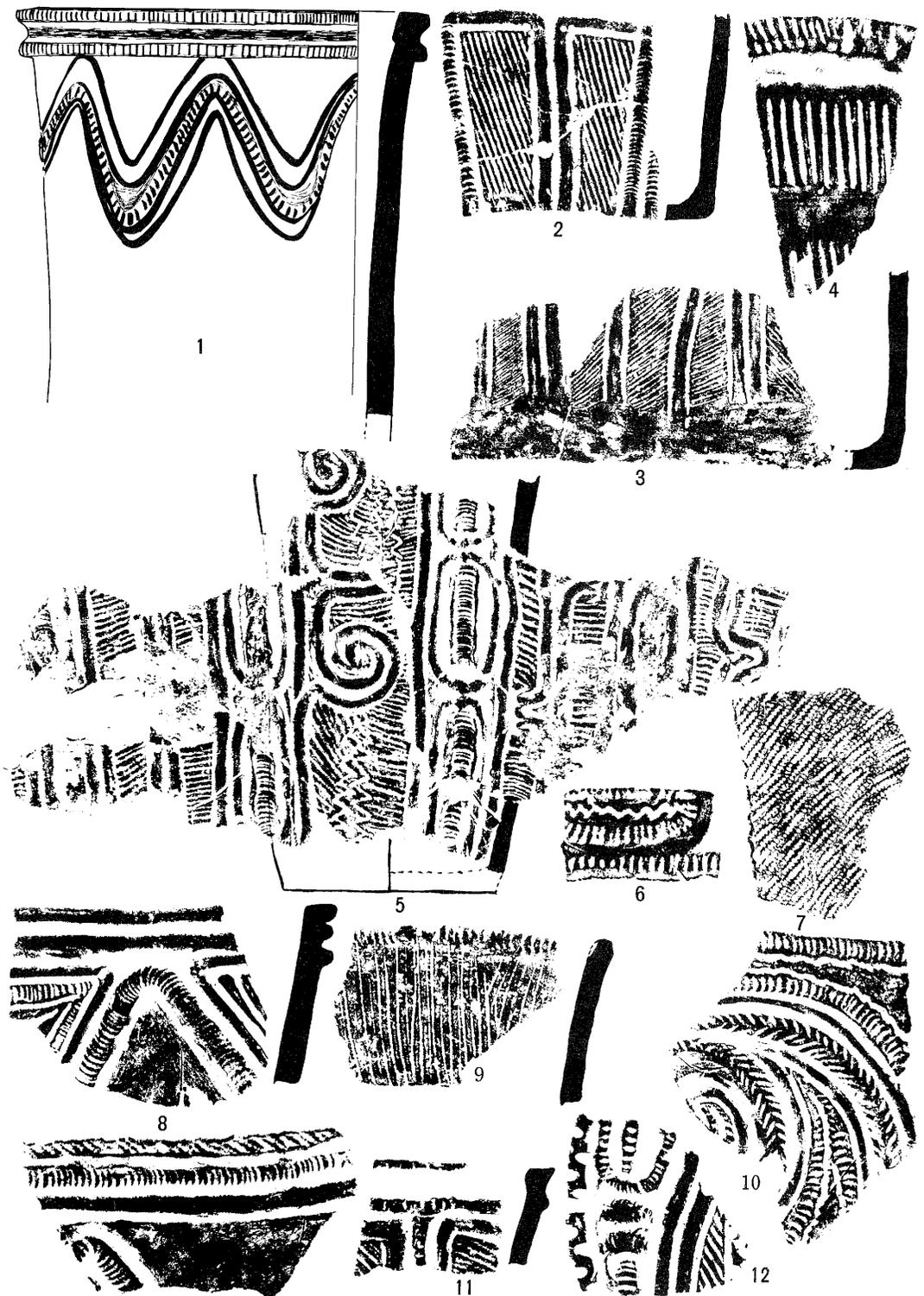
4は第1区のK-8グリットから出土した土器である。簡素な沈線文と，底部に網代痕がつけられた中期終末期の小型深鉢である。

#### （4）後期（第28図）

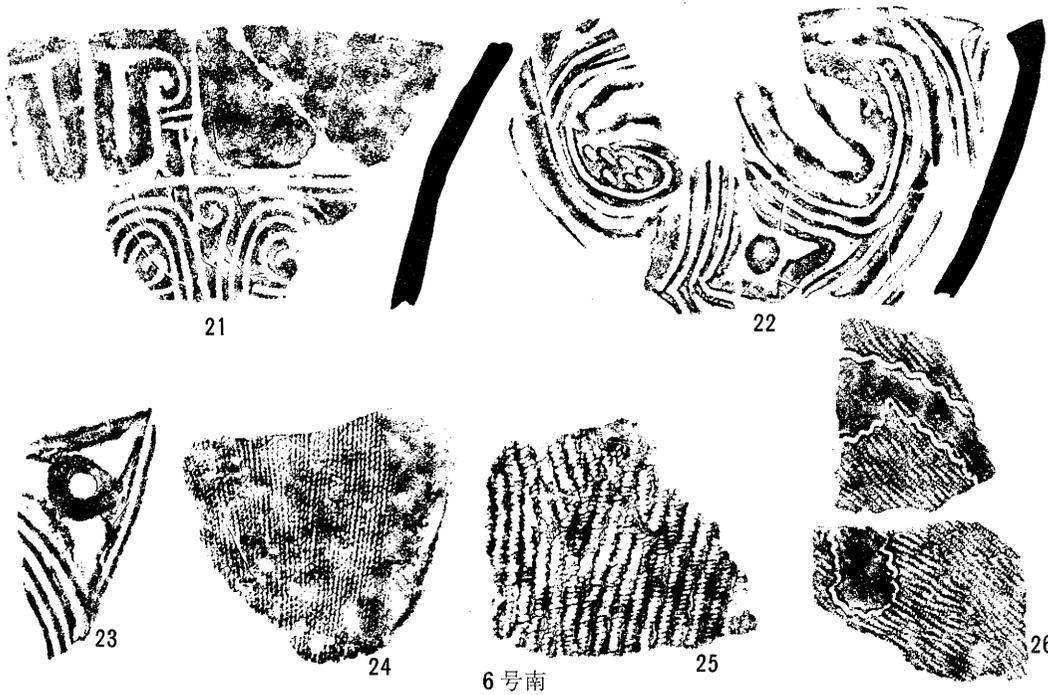
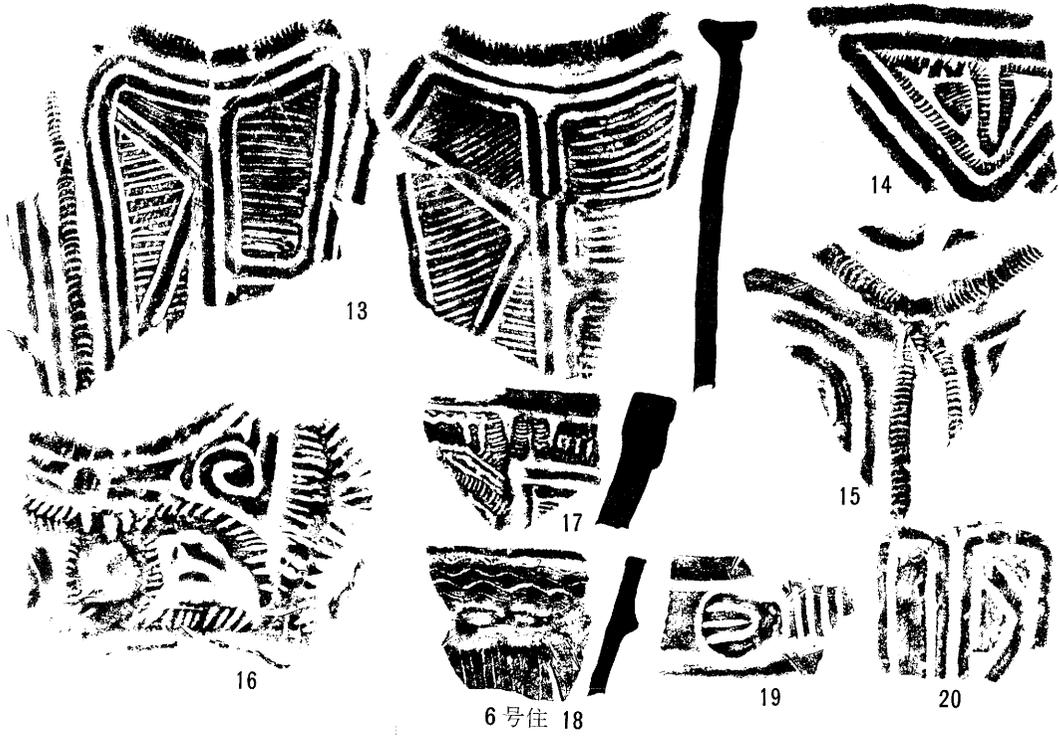
第1区および第3区より検出された。すべて堀之内式に比定されるものである。10は第1区の南側農道沿いトレンチから検出された独立土器で，表土下23cmの浅いところに遺存した。



第21図 第4号・第5号住居址出土土器（3分の1，14-6分の1）



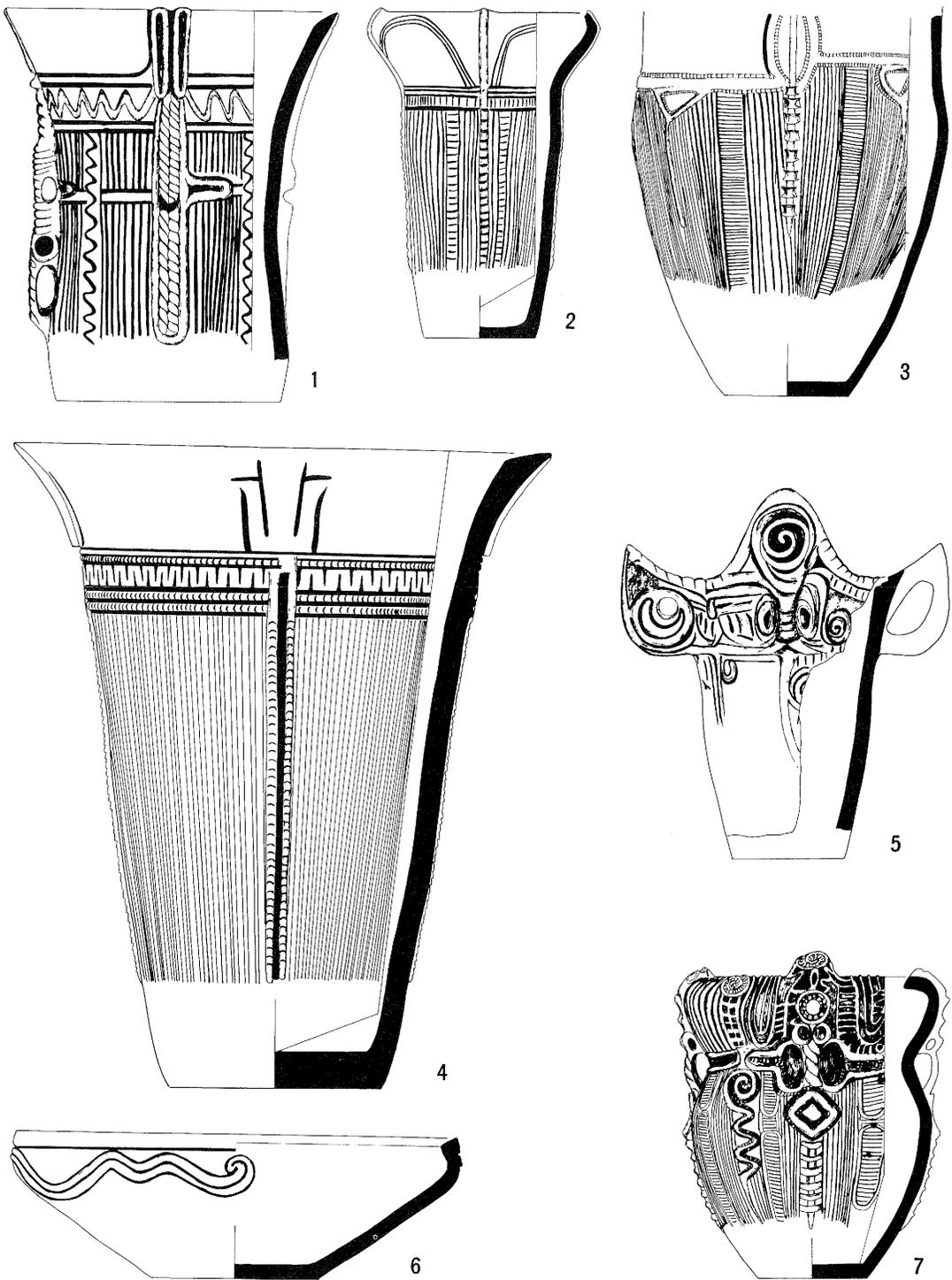
第22图 第6号住居址出土土器(3分の1)



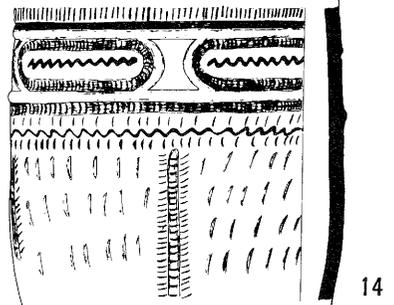
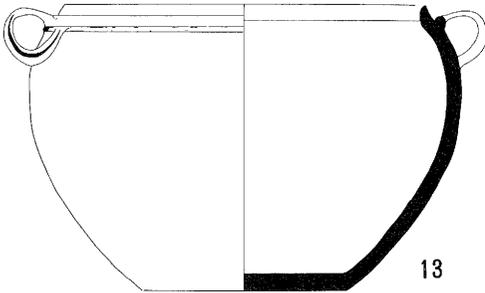
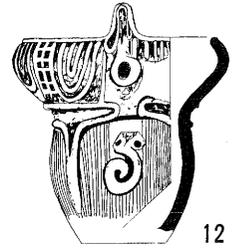
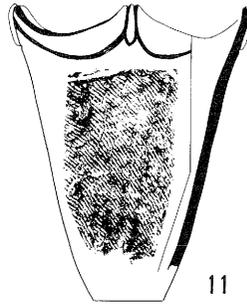
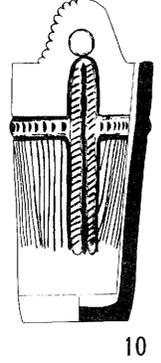
第23图 第6号住居址出土土器(3分の1)



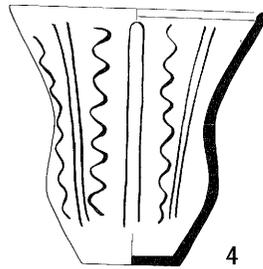
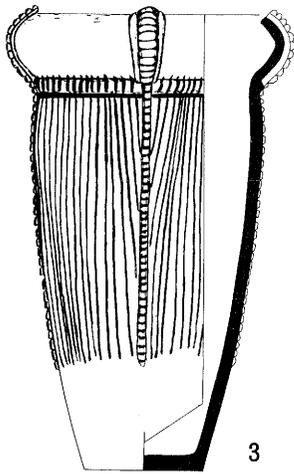
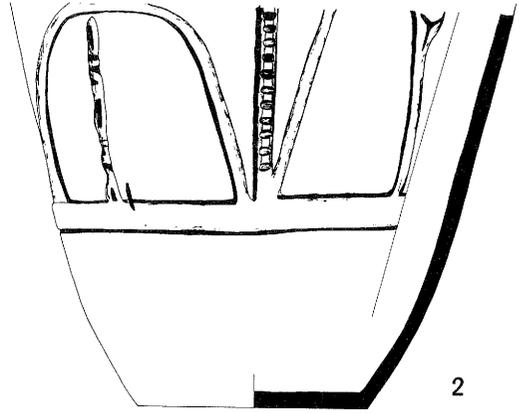
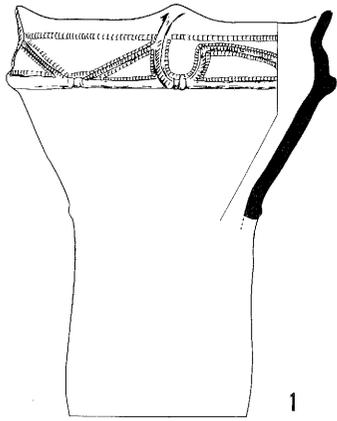
第24図 第8号・第9号・第10号出土土器（3分の1）



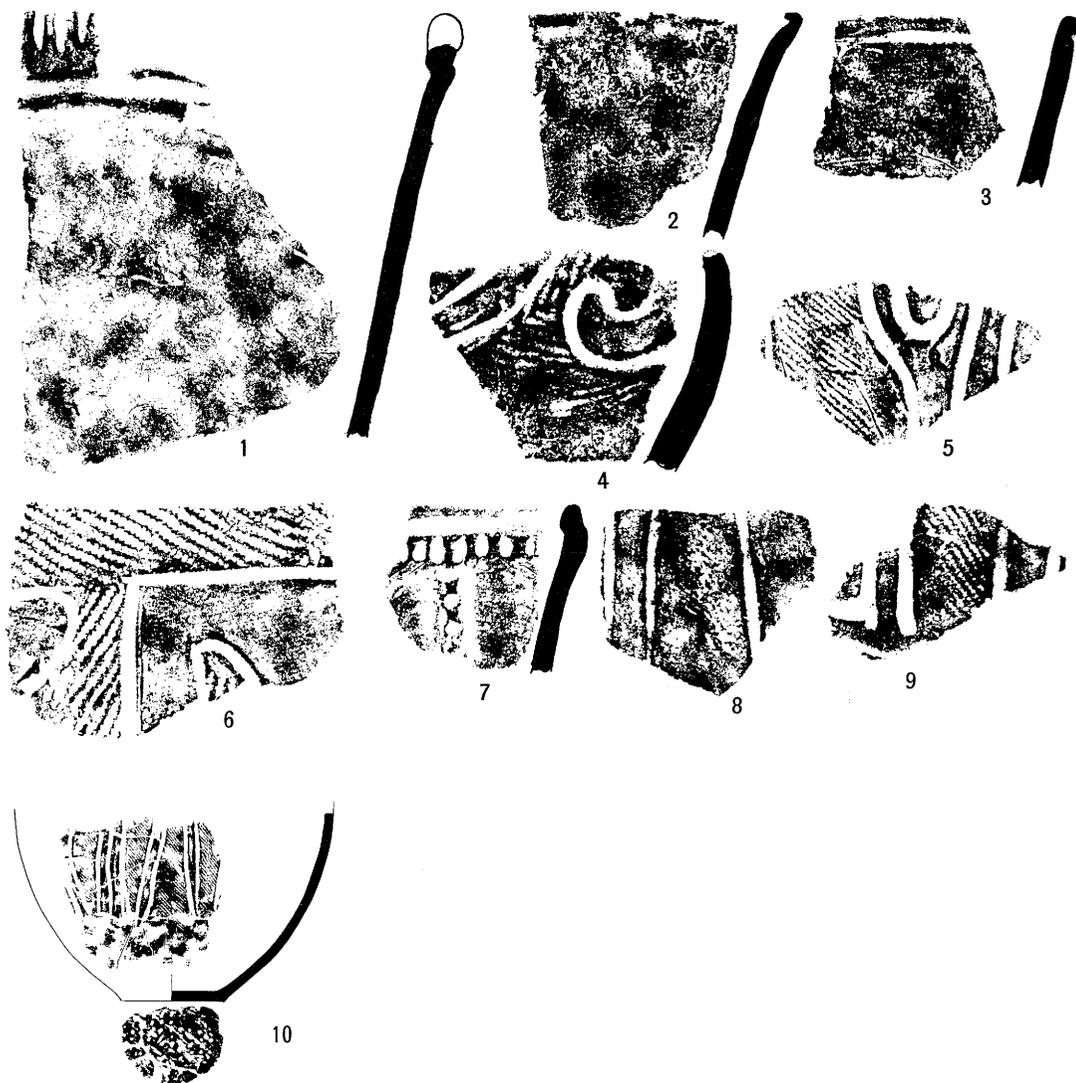
第25図 第10号住居址出土土器（6分の1）



第26図 第10号住居址出土土器（6分の1）



第27図 第10号住居址出土土器（6分の1）



第 28 図 縄文後期土器（3分の1）

## 2. 石 器

第1号住居址（第29図1～5）上層の縄文中期土器破片と共に5点の打石斧が出土した。1は粘板岩で側縁の調整剝離は少ない。2・5は砂岩，3・4は頁岩製である。

6～12の打石斧・磨石・凹石は第1区の各グリットから出土した。6はE-4の木島式土器に伴出したサヌカイト様の石質の横刃型石器である。裏面はほぼ平で，片側縁のみを両面に加撃剝離している。

第2号住居址（第29図13～18，第36図10・11）図示したものの他打石斧の破片2点が出土している。13は青色をした砂岩系の遠州式磨石斧。上端を断折し，両側を敲打して抉入部を作出する。14・15も同一石質で，15は左側縁を敲打して抉入部を作出する。16・18は頁岩製で，18は使用による刃部の磨滅が顕著である。17は黄白色の頁岩で，石質がやわらかく風化が著しい。第36図10は石鏃破片，11は剥片の縁片を僅かに調整した削器様の石器である。この他亀甲状の黒曜石塊が出土した。

第3号住居址（第30図1～9，第36図5～8）磨石斧1，打石斧は破片を含めて17点，石鏃3，石匙1が出土した。1は緑泥片岩の遠州式磨石斧で，刃部両面を欠損する。2，5～9は頁岩製，3は砂岩製である。4は特異な石器で，安山岩の原石の片面のみを周縁から加撃剝離している。36図6は脚の長い石鏃，7は粗製の三角鏃，8は硅岩製の縦型石匙である。

第4号住居址（第30図10～20）石囲炉の周辺から打石斧は破片を含めて17点が検出された。完形に近いもののみを図示したが，11が砂岩の他はすべて頁岩製である。10・11・16は炉址面より下層の出土である。18は石匙であるが調整加工は少ない。

第5号住居址（第31図1～11）石で囲んだ埋甕の周辺から出土したもので，半磨製石斧1，大型石匙4，打石斧は破片を含めて15点出土した。1は質の余り良くない緑泥片岩系の石質で，全面を敲打により粗く調整し，先端刃部を欠損する。図示した打石斧のうち，4が砂岩で，他は頁岩のため風化剝落が著しい。8は砂岩製の縦型石匙でつまみは小さい。9も縦型で頁岩製，つまみは長く抉入部の加工は浅い。10は砂岩で，裏面は平な一次的剝離面。表面の大半に原石面を残す。粗く抉入部を作出し，剝離により生じた斜めの先端縁を刃とする。右側縁には比較的細かな調整を施す。11は頁岩で，つまみの部分が刃部と同じ位大きく横に張り，抉入部は深く切れ込む。特異の型態の横型石匙である。

第6号住居址（第31図12～20，第32図）1は大型磨製石斧で褐色土層中に縦につきささって出土した。緑泥片岩製で，基部の断面はまるく，刃部は蛤状を呈する。基部は敲打調整のあばた状の凹みを残し，刃部はよく研磨されている。打石斧は図示した他に14点の欠損品が出土している。14・17・19が砂岩で，他は頁岩製で風化による磨滅が著しい。第32図1～3が石匙で，1は緑色を呈する砂岩様の石質で，先端が尖り，抉入部が左右非対称である。2は剥片を抉入部のみ僅かに調整を加えて石匙としたもの，3は灰茶褐色の柔らかい頁岩製である。4は小型石皿で，石質はぼろぼろした比較的軟い安山岩。皿部の底と裏面に敲打による調整痕を残す。6は安山岩の円盤石器

で、周縁を粗く欠いて略々円形に整え、表面は磨って平としている。6～12は凹石である。

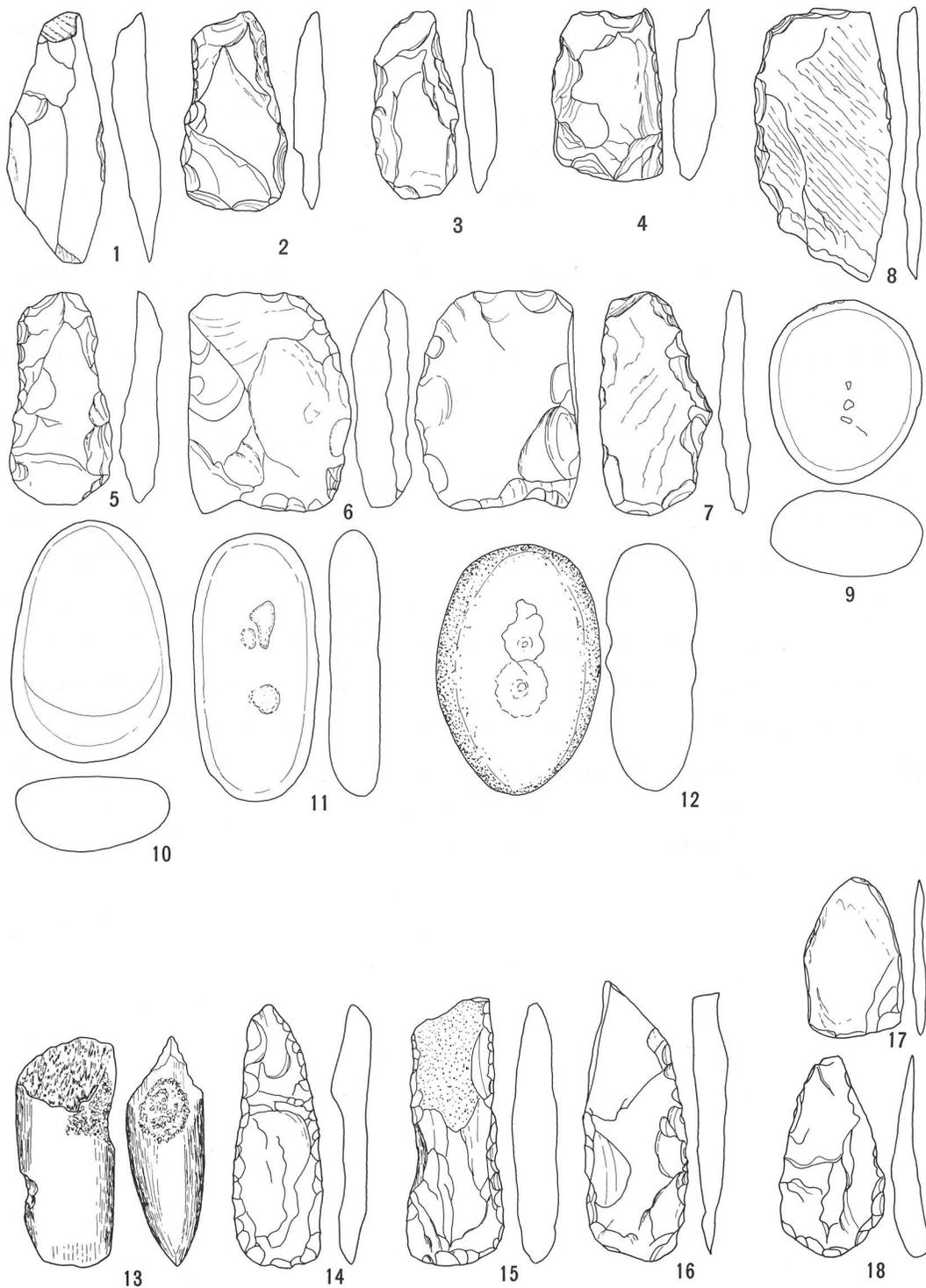
第7号住居址（第36図1・2） 図示した2点の石鏃の他、凹石1点が出土した。（第32図13）石鏃は片面は扁平にちかく、先端を鋭利に調整するが、ずんぐりした形態のものである。

第8号住居址（第33図1～14） 1は小型の定角式磨石斧で、石質は粘板岩、基部と刃部を欠損する。2は緑泥片岩製の棒状に近い磨石斧で刃部を欠損する。4は砂岩製、5は頁岩製である。3は調整は少ないが石匙の機能をもつ石器である。6～14は磨石および凹石で11・12は両面に大きな凹みを有する。

第9号住居址（第33図15） 撥形の打石斧1点である。砂岩製で裏面は平で、表面の刃部に原石面を残している。

第10号住居址（第33図16～20、第34図1～7） 磨石斧1点と打石斧は破片を含めて21点出土した。16は青灰色を呈した硬砂岩質の石で、紡錘形を呈し、蛤状の刃である。頂部は平で磨かれず、加撃による剥離痕がみられる。第33図17・18、第34図3・4は砂岩製で、他は頁岩製、17は撥形を呈し、17・18・20、第34図1・6は刃部が使用により鈍磨している。

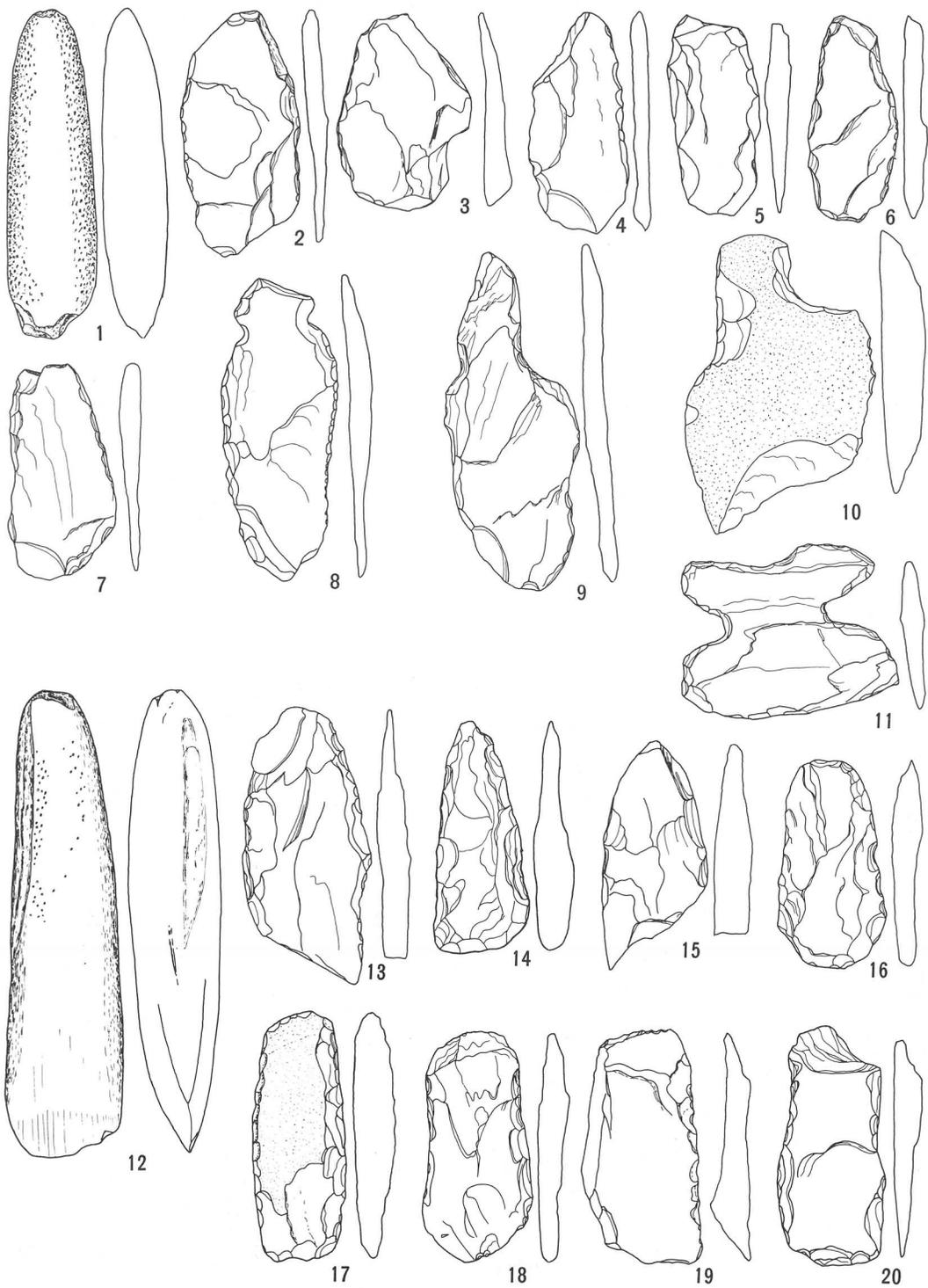
第3区（第34図8～25、第35図） 第3区は水田として耕作されていた区域であるが、遺構外の各グリットから多量の打石斧・凹石・磨石が出土した。打石斧は図示した完形品の他に18点の破片が検出されている。8は蛇紋岩系の定角式磨石斧で、両端を断折する。9は緑泥片岩の大型の短冊形石斧である。裏面は全面を剥離し、表面は先端部分を剥取して刃部を薄くし、基部に近い面に原石面を残す。側面形は僅かに弯曲する。10は小型で浅い抉入部があり、刃部両面に磨痕がある。11は砂岩製で10と同形態のものである。水田であったためか、頁岩製のものには特に風化により磨滅が著しい。29・30は砂岩製の横形石匙である。31～43は磨石、凹石であるが主なもののみを図示した。第36図14は硬玉製の飾玉で、両面を平に研磨し、孔の部分が欠損している。第3区の中央に設定したトレンチの東端から検出された。



第 29 図 第 1 区・第 1 号住居址 (1~12), 第 2 号住居址 (13~18) 出土石器 (3 分の 1)



第30図 第3号住居址(1~9), 第4号住居址(10~20)出土石器(3分の1)



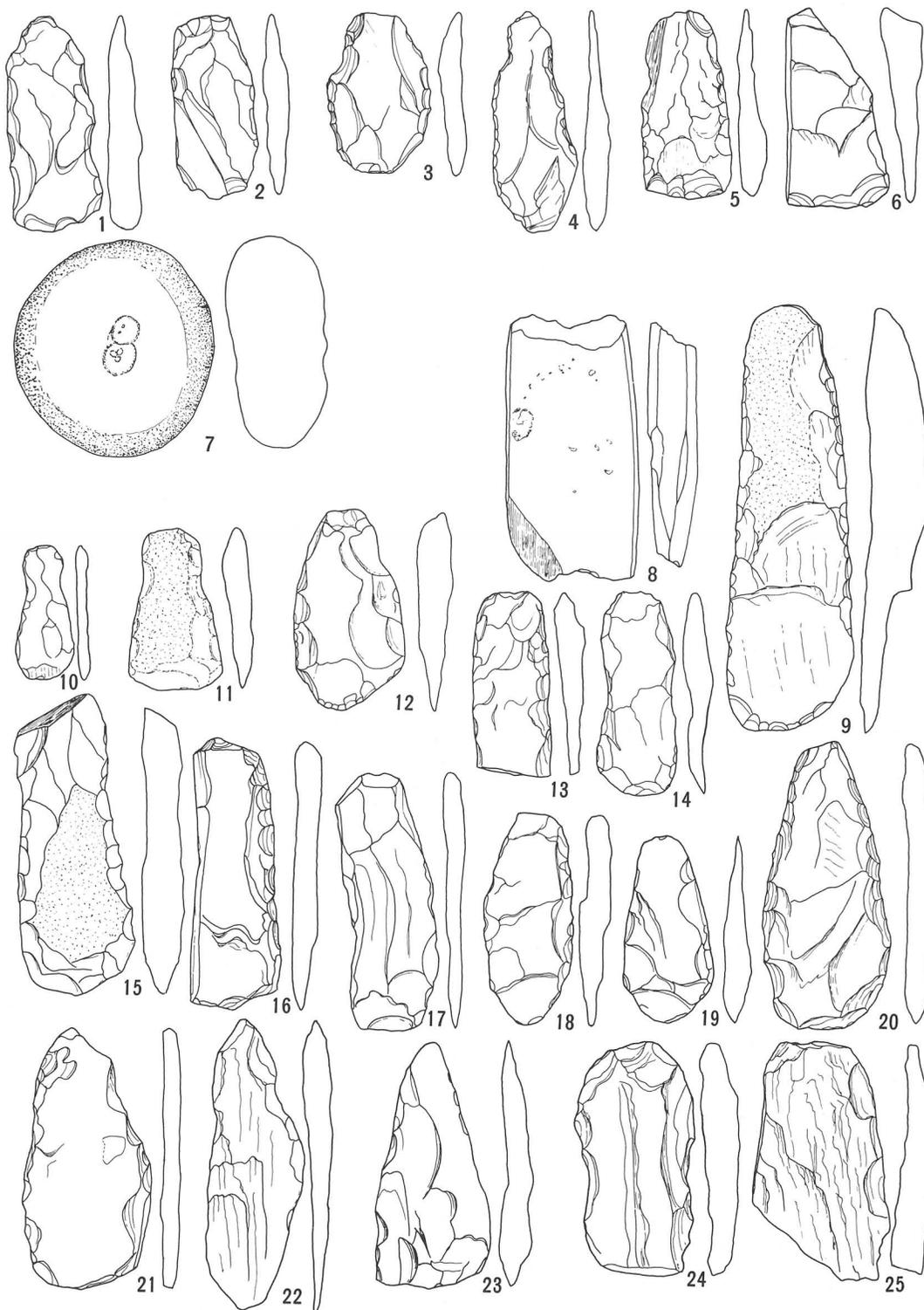
第31図 第5号住居址(1~11), 第6号住居址(12~20) 出土石器(3分の1)



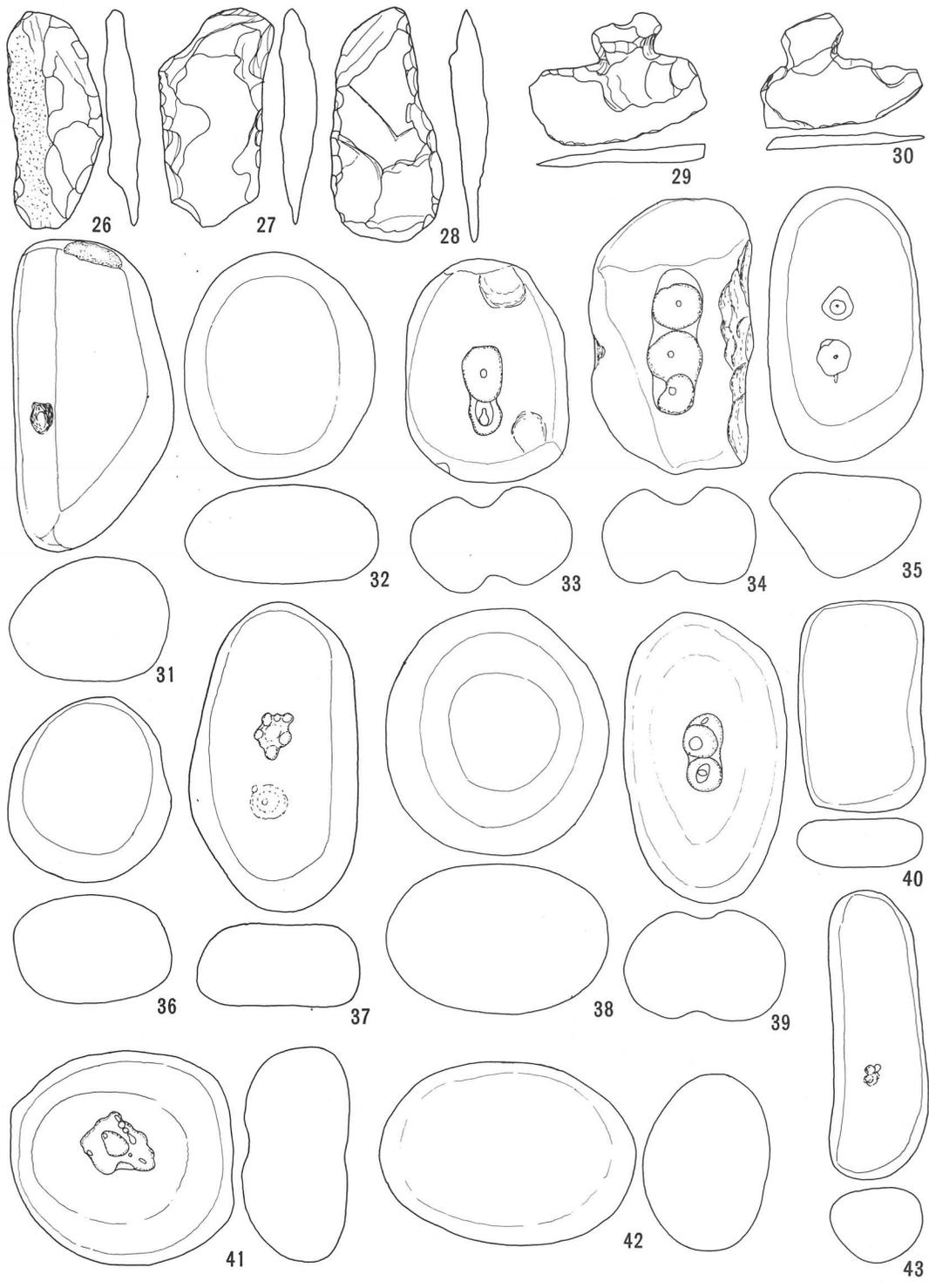
第 32 図 第 6 号住居址出土石器 (3 分の 1)



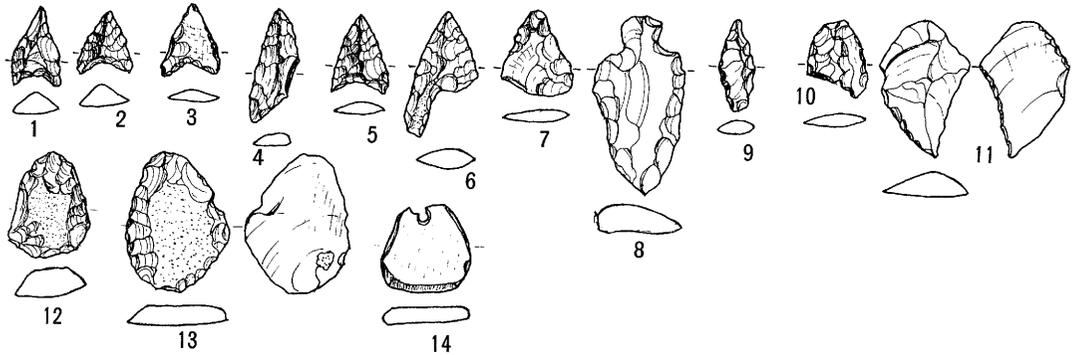
第33図 第8号住居址(1~14), 第9号住居址(15), 第10号住居址(16~20)出土石器(3分の1)



第34図 第10号住居址(1~7), 第3区(8~25)出土石器(3分の1)



第35図 第3区出土石器 (3分の1)



第36図 石鏃・石匙・剥片石器 (2分の1)

## V ま と め

今回の調査で当遺跡から発見された住居址は、縄文前期初頭に属するもの2基、中期の住居址8基である。前者の住居址2基の発見は、茅野市内において、米沢の駒形遺跡、丸山遺跡に続くもので、また、本年湖東の県営住宅地中大塩団地内の中村遺跡において1基が発見されたので、併せて5例となる。これらの住居址は当遺跡の第1号住居址を除いては、形態、規模に若干の相違はみられるものの、構造についてみると、地床炉であること、周溝をめぐらし、周溝内に小孔、斜孔がほぼ等間隔に穿たれている点に共通性が認められ、基本的には同一構造の住居址といえることができる。

第1号住居址については、ローム層への掘り込みが全くなされていなかったため、明確な構造は把握できなかったが、炉址は小石1個を配した地床炉である。第1号址と第7号址は約45m離れて位置し、また出土土器の型式もちがうので、時期的に前後するものと考えられる。即ち、第1号址出土の土器は無繊維薄手の爪形文沈線文土器で、第7号址出土の土器は繊維を含有する縄文の施文された尖底土器である。この繊維土器は花積下層式に比定されるものであるが、中部山岳地帯においては一般的には木島式土器が共伴するが、第7号址からは木島式土器片は全く検出されなかった。

第1号住居址の西側から検出された木島式土器片は、1片の貝殻条痕文土器と無文の繊維土器を伴出した。ここからは焼土が検出されているから生活址と考えられるが、出土状態から定着的なものではないだろう。むしろ第1号址との関連が想定される。

中期に入り、その前葉に属する住居址第2号址、第3号址が6mの間隔で隣接して発見された。住居址の形態および出土土器から、ほぼ同時期に営まれた住居址と思われる。2号址は小型石囲炉で、炉中に無文の土器底部が直立して遺存し、第3号址は埋甕炉である。両者共に周壁に斜孔を有し、床面に多くの小孔が穿たれていた。

第4号・5号・6号・8号・9号・10号は中期中葉から後半に属する住居址であるが、第10号址を除いてはすべて黒土層下層から褐色土層面に床面が構築されたため、柱址・周溝・周壁等の検出が困難で、その構造を確実に把握できなかった。第5号址の石で囲んだ埋甕は特殊な遺構である。第6号址は中期中葉の土器片をかなり多量に出土したが、住居址の中心となるべき炉址を欠除し、焼土も発見されていない。

第10号址はローム層に掘り込まれた典型的な竪穴住居址である。炉は竪穴炉で、底部に小孔が穿たれている。これとは別に、竪穴炉の西部分の床面が赤く焼け、焼灰が堆積しており、地床炉として利用されたものであろう。これにも小孔が穿たれている。また土器の出土状態は、北西部周溝内の埋甕を除いては覆土中に包含され、その出土状態は住居址廃絶後に投棄された様相を示していた。そしてこれらの土器は、周溝内の埋甕より時期的に後出の土器である。埋甕は、中期後葉の住居址内の埋甕とは位置的にもまた用途についても異なるものであろう。

ピットは16箇所発見されたが、深さ45cmの11号、55cmの13号・15号、最も深いものが14号の95cmで、他のものは極めて浅く20cm前後である。黒土層の堆積が厚く、当時の地表から掘りこまれた竪穴の、底部のみを検出する結果となったためであろう。

さて、おわりに今回の調査においては、遺跡の中心と推定される湧水に最も近い水田、俗称薬師田の調査を欠除し、また発見された遺構も、黒土層から褐色土層にかけてのものは後世の攪乱もみられ、遺跡全体の集落構造を究明するまでには至らなかった。しかし前期初頭の住居址2ヶ所が発見されたことは、その出土土器と共に、更に今後の資料の増加を俟ってあらためて検討を加えたいと思う。また、下ノ原遺跡は前期終末の下島期、中期前葉から終末、そして後期堀之内期に至るまでの長い期間にわたり生活の場として利用されたことが明らかとなった。

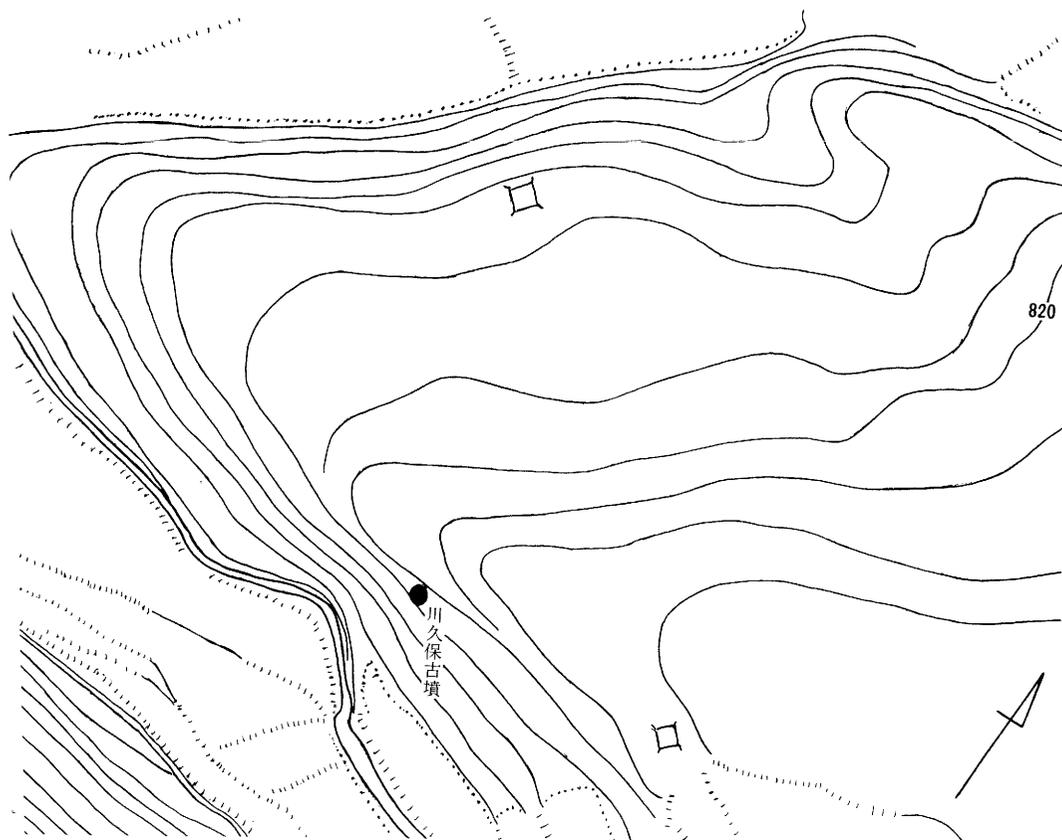
## 第2編 川久保古墳



## 1. 発掘の経過

茅野市総合スポーツ公園用地内に、石小屋・川久保の2古墳が存在することは、諏訪史第一巻により周知されていたが、墳丘も崩壊しかつ石室も失われてしまった今日、その位置も不明確となっていた。このうち、石小屋古墳は戦後果樹園を作るために石室が撤去されたことが判明したが、川久保古墳は林の中に埋没して墳丘も消滅し、地元の古老二・三が僅かにその位置を記憶に止めるのみであった。たまたま下ノ原遺跡発掘調査中に、スポーツ公園内道路開設のため、林が伐り開かれたので現地調査を行なったところ、小石が集積散乱してやや盛り上がった箇所が発見され、ここが川久保古墳の位置であるとの推定が下された。その後、工事のブルドーザーがこの上を通過したため、土中から僅かに奥壁の頭部が露わられて、石室の一部が残存していることが確実視され、急速、下ノ原遺跡調査事業の一環として発掘を実施した。そして石室の下部構造が残存していたために埋没して保存することとし、道路も最初の設計を変更して僅かに南に寄せられることとなった。

発掘作業は11月19日に開始されて12月7日までの間、断続的に行なわれ、翌50年4月に宮坂光昭氏により測量が実施された。(宮坂虎次)



第37図 川久保古墳附近地形図(2,000分の1)

## 2. 墳 丘

本古墳の位置する地形は、長峰丘陵を南方に、北方には上川を持つ、両者にはさまれた場所で、荒神部落下方で派生した舌状台地の末端に近く、この舌状台地と並行して、川久保川が流下し、上川に合流している。

この舌状台地端で川久保川に面した、南斜面に川久保古墳が築造されているが、古墳の前方、すなわち南側に長峰丘陵が、荒神から宮川茅野へ走行し、目前には長峰中学校、茅野高校がみえる。川久保と言う地名のように長峰丘陵と、この舌状台地にはさまれた窪地で、温暖な場所である。

地元民の古くからの言い伝えでは、川久保古墳と、上方の荒神部落のすぐ下方にある、下ノ原遺跡北端の2基の古墳(下ノ原1, 2号墳)が知られていたが、いずれも破壊や盗掘されている事が知られていた。現在はこれから3基の古墳の位置すら不明確になっていたが、今次調査により、調査に参加した老人達によって知る事が出来たのである。なお川久保古墳は、スポーツ公園の取付道路工事によって、その一部が判明したが、道路の設計を変更して調査清掃をする事が出来た。

墳丘はすでに内部構造が破壊されていたため、マウンドはほとんど判別できない状態であったがしかし現地を詳細にみると、緩斜面上に、僅かに地ぶくれ状に盛り上がりが判る。

古墳の位置する部分の地層は、黒土が80ないし100cmあって、その下層は河床礫層が厚く堆積している。古墳の入口から道路を約5m掘削して作ったが、その断面は表土を除いて、厚い河床礫層であり、旧川久保川の氾濫原であったことが判る。したがって、古墳は現今流れている川久保川に面し、築造されたことになる。(宮坂光昭)

## 3. 石 室

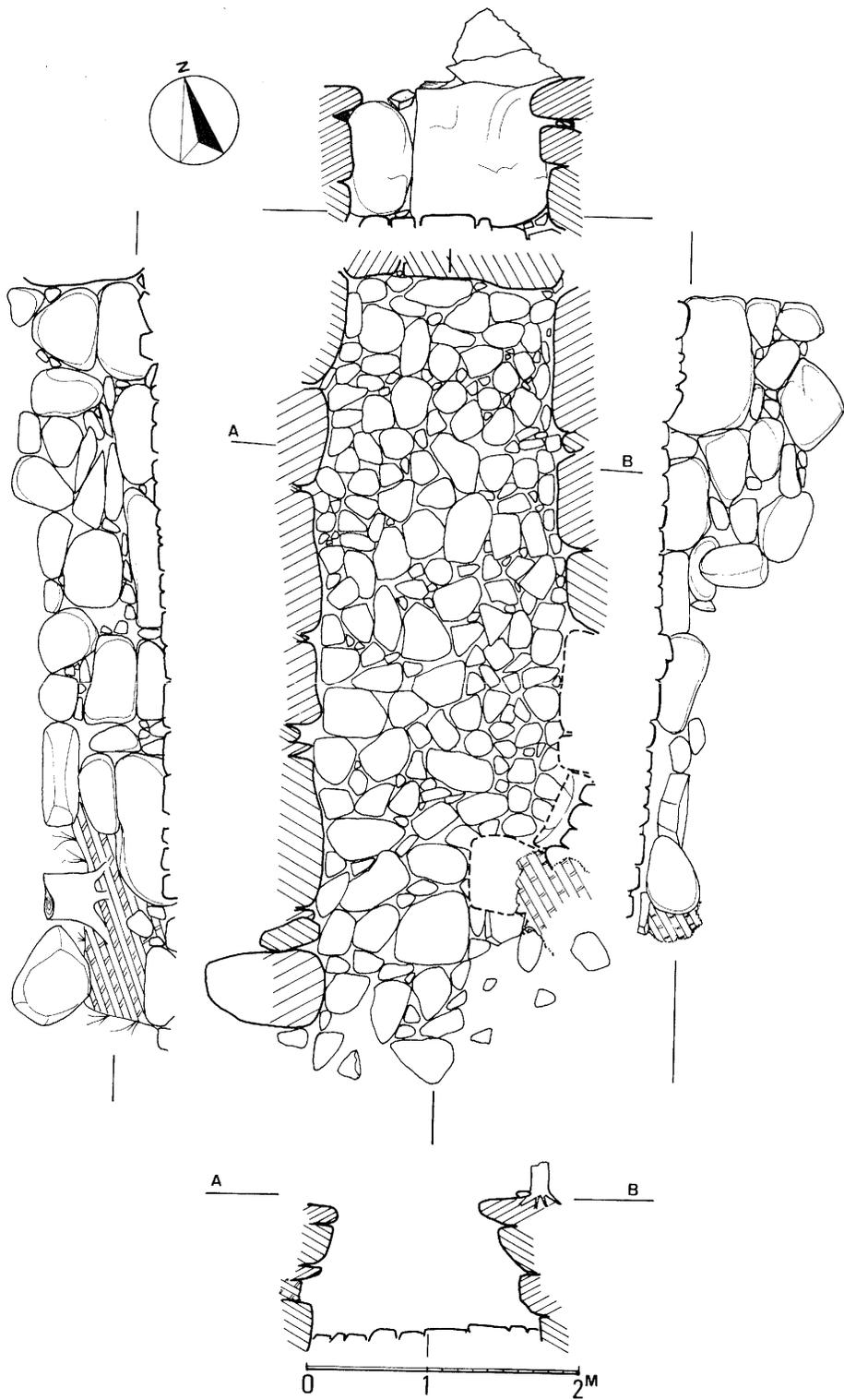
発掘清掃した石室の状況は、東側壁が入口から約2.5m迄まで持去られたり、移動したりしている。そのほかの部分には、基盤石から、多い部分で3段、約1mの石積が残されていた。したがって、石室底には幸いにも平らな円礫が一面敷きつめられた状態で、遺存されていた。

石室の規模は、全長が5.0m。奥壁部での幅は1.27m。中央部で1.60m。入口幅は約1.40mであり、石室内の高さは現存する最も高い部分で、約1m程度しか判らない。ただし石室底面が、奥壁部から入口にかけて、約5°の傾斜をもって下っている事がうかがえるが、自然沈下か、人工的に構造したかは、にわかに決定しがたい。主軸方向はS13°Eの南東に開口している。

これらの点から、この古墳の石室の形態は、羨道部を持たないいわゆる無袖式の長方形石室であるが、中央部分には、わずかであるが胴張を有する形である事が知られるものである。

この石室の構築法をみると、奥壁の右側に1×1.5mの大きな鏡石を据えているが、この鏡石は山石のようであり、内面に剥離痕がみられるが、人工的なように観察される。この山石を除けば、そのほかの積石は、すべて長楕円形の河原礫で、持送り式に積んでいる。

石槨の裏づめには、河原の礫を用いており、左右壁裏はあまり厚くないが、奥壁の裏は約1mの厚さで、裏づめしている。この詰石から1.10mの間は石が少なく、再び外周する石積みがなされて



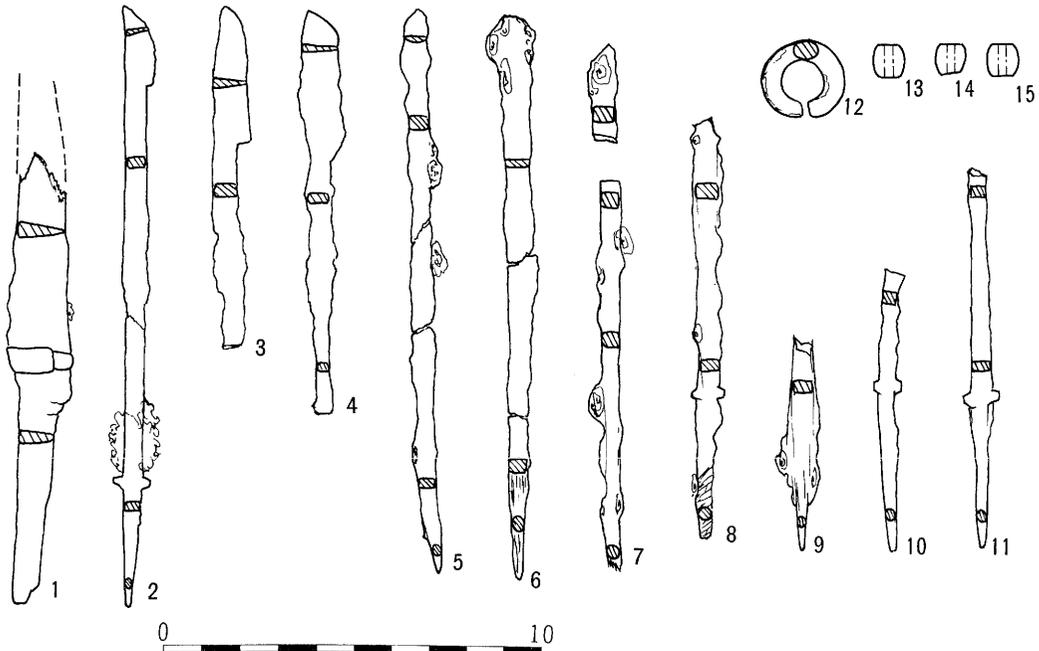
第 38 図 川久保古墳石室実測図

いる。

石室の西と北方へのトレンチによる所見では、2帯になる外護列石が、不整列に河原石によって並べられていた。奥壁裏側から外周する積石までの距離は4mである。(宮坂光昭)

#### 4. 副 葬 品

副葬品の数は、極めて少なかった。石室の破壊と同様、古くから盗掘にあったものであろう。



第 39 図 川久保古墳副葬品実測図 (2分の1)

1 刀子 2~11 鉄鏃 12 耳環 13~15 丸玉

(1)は刀子であるが、切先部分は腐蝕が著しく、全長は不明である。茎部分は、5cmで背厚が4mmある。関は片関であるが、刃幅は1.5cm以上あったようである。刃の背は平棟式で5mmある。関の際には鞘口金具が錆着したままである。

(2)は片刃形の鉄鏃で、全長16cmある長頸の鏃であり、頸部と茎部の境に棘状の突起が作られている。いわゆる棘籠被鏃(きょくのかつぎぞく)形式である。

刃部は2.2cmの長さの片刃形で、頸部は長いが、その断面は矩形をなし、茎部も断面は上方で四角。下方は円形となり、そこには木質部分が錆着している。

(3)と(4)も片刃鉄鏃の、頸部で折損したものである。この方は(1)と比べて、刃部が3.5cmもある長い片刃である。頸部も断面矩形の部厚い、しっかりした作りである。

(5)は15.2cmの、柳葉形をした刃先の鉄鏃である。全体に錆が著しいが、刃部断面はカマボコ形。頸部は厚手の矩形。茎部は四角形と丸形をしている。

(6)は刃先が錆で激しくいたみ、判断に苦しむが、ツクシの穂先形をした鉄鍔と推定される。頸部は薄い長方形の断面。基部は方形と丸形の断面で、竹状の木質が錆付いている。

(7)は頸部の折損品で、上下端の状態は不明である。

(8)も頸部と茎部分のみで、刃先の形は不明である。茎部分には、木皮状の巻いたものが良く残っている。この鉄鍔も、茎と頸部との境に棘状突起のある、棘篋被鍔といわれるものである。

(9)は鍔の茎部分であるが、錆が著しく、それ以上は不明である。

(10)と(11)は鉄鍔の下方部分の折損品である。いずれも、棘篋被鍔形式のものである。

(12)は環であるが、緑青をふいた小形のものである。ややつぶれた円形であって、その断面も楕円形をしている。かつて金銅鍍金がなされていたものかもしれないが、今は金色は少しも見えない。地金は鉄製ではないから、銅地かも知れない。

(13)～(15)は、丸玉である。黒茶色をしており、練玉製である。

そのほかに、瑪瑙の質のよくない原石(4cm大の球形)があるが、当地方古墳の終末期に、海浜石など発見される例があるが、意識的なものか、偶然に入りこんだかは、まだ不明確の段階である。

(宮坂光昭)

## 5. 考 察

川久保古墳は発掘清掃の結果、墳丘は削平されており、石室もまた上半分は破壊され、あまつさえ、副葬品はわずかに残る状態で盗掘をこうむっていた。そうした不利な条件をわずかに救っているのは、石室の基盤石は大半が残されていて、平面プランが判明するという点である。

副葬品は腐蝕の著しい鉄鍔が主であるが、これも、一つの手がかりをあたえてくれる資料であろう。

石室についてみると、羨道と玄室部分の区別のない、長方形の小形であること。これはすでに論じたことがあるが、当地方古墳の石室形態の変遷<sup>(1)</sup>によると、両裾式の、玄室と羨道の長い形から、片袖式石室→無袖式(長方形石室)へと、羨道部分を省略する様相が知られている。この長方形小形石室例は、岡谷今井長者蔵古墳形と呼称するものが相当し、古墳最終末に属すものと考察される。

石室の石積は、河原石によるもので、持送式という、アーチ形になる。すなわち石室の上方へ行くほどせまくなり、ドーム状となる手法をとっている。石材は近くに河原石を利用できる点、これを用いている。鏡石については、山石を割っているが、切石的な手法を用いた例は、当地方にまだ確認していないが、古墳の先進地では、後期古墳の大形石室に広く用いられている7世紀以降の技法である。

石室の平面プランによると、中央部に胴張り手法がみられるが、後期末になると、群馬から佐久地方の古墳に顕著に認められるもので、古東山道筋で通ずるこれら地方には、注意すべきものであろう。

石室の外周に2列の外護列石帯が認められたが、乱れた積み方のようで、王経塚古墳の形式から

の流れをくむものであろう<sup>(2)</sup>。

以上石室について4点から考察をし、近接の古墳例を参考にすると、王経塚古墳に近似するものである。ただし、石室の平面プランで判るように、王経塚古墳の片袖式石室に対し、川久保古墳は無袖式の長方形をとっており、王経塚古墳（7世紀後半）より後出する古墳と考えられる。

副葬品では鉄鍬がもっとも多いが、それは尖頭式鉄鍬のみで、そのうちわけは、片刃鍬3本、柳葉形鍬2本であり、特に注意する点は、茎部分の断面円形で、木質の鏝着していることは、竹柄への装着が仕易い事を考えており、奈良朝の正倉院蔵の矢とよくにている。

また篋被の長いのも、正倉院御物の矢と同例である。

王経塚古墳から鉄鍬についてみると、片刃鍬が多くなって来る事。棘篋被鍬形式も増加する傾向にあり、これが、時期の降下する例になる事も考えられるが、さらに例の増すのをまちたい。

刀子、金環、丸玉は王経塚古墳例と類似し、これに鉄鍬を加えると、同形の副葬セットとなるが、両者の古墳築造の時期の近接する事をうかがわせている。

以上の少ない諸資料からの考察をまとめると、王経塚古墳より後出する古墳ということができよう。

茅野市の古墳群を、湖盆東縁古墳群として把握してみると、そこには、自然立地によって区割される古墳群が、永明寺山麓古墳群と、上川河床古墳群それに長峰丘陵古墳群の3群にグループされる<sup>(3)</sup>。川久保古墳は、下ノ原1号、2号墳とともに、長峰丘陵古墳群に属するものであるが、長峰古墳群は、3群の古墳群中、もっとも後出する古墳群<sup>(4)</sup>と考へられている。すなわち、長峰古墳群は、無石槨墳が多く、これは、古墳の終熄期として考えているもので、墳丘は造るが、その内部主体の石室は、もう構築することなく、木棺直葬があるいは木棺周囲に列石を並べる程度のもとなってしまうからである<sup>(5)</sup>。

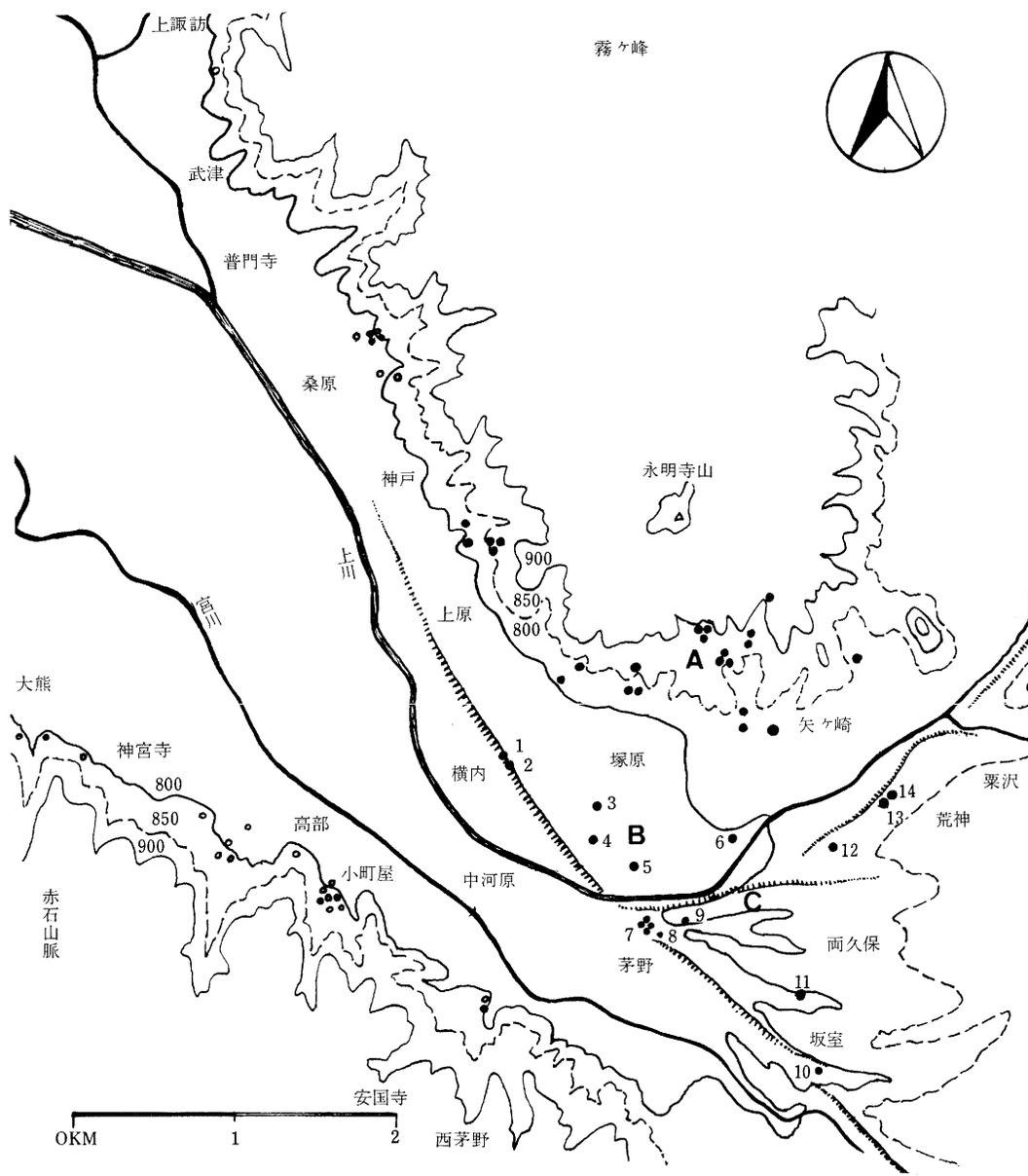
(B) 上川 河床 古墳 群	1. 一の坪古墳 2. 塚ノ越古墳 3. 犬射原古墳 4. 姥塚古墳 5. 大塚古墳 6. 王経塚古墳
(C) 永 峰 古 墳 群	7. 四ツ塚古墳, A, B, C, D 8. 上ノ山古墳 9. 金罌塚古墳 10. 雨降塚古墳 11. 田沢沢古墳 12. 川久保古墳 13. 下ノ原1号墳 14. 下ノ原2号墳

(注) 第40図参考

そういう終熄期古墳の多いなかにあって、川久保古墳は、立派な石室をもっているというのは、長峰古墳群中では、初現に属す古墳と考えられるものである。

この川久保古墳の主な性格が、いかなるものか、いまにわかに決めがたいが、同じ長峰丘陵古墳群の、丘陵末端の茅野市部落直上に築造されている、四ツ塚古墳、金罌塚古墳等とは、かなり異った立地をとり、その性格も、前者は馬具と武器、それに古氏族に接することから、武人的な姿がネガティブに浮んでくる。

しかるに川久保古墳の方は、立地からして農耕的な経済基盤の上に成り立った、共同体の権力者の姿が想定される。そのヒンターランドは、上川と長峰丘陵のあいだにはさまれた、川久保川の作っ



(A) 永明寺山麓古墳群 (B) 上川河床古墳群 (C) 長峰古墳群  
 (上川河床) 1. 一ノ坪 2. 塚ノ越 3. 大射原 4. 姥原 5. 大塚  
 6. 王経塚  
 (長 峰) 7. 四ツ塚 (A, B, C, D) 8. 上ノ山 9. 金鑄塚 10. 雨降塚  
 11. 田沢沢 12. 川久保 13. 下ノ原1 14. 下ノ原2

第 40 図 湖盆東縁古墳群

た氾濫原上の、水稲農耕によるものであるだろう。

注)1. 宮坂光昭。諏訪盆地湖北における古墳発達の一試案。信濃 20-4

注)2. 斎藤忠。宮坂光昭。宮坂虎次。王経塚 茅野市教育委員会 昭 50

注) 3. 宮坂光昭。湖盆東縁の終末期古墳群の考察 信濃 22-4

注) 4. 注 2 と同じ

注) 5. 宮坂光昭。地方における古墳時代末期墓制の展開 信濃 25-4

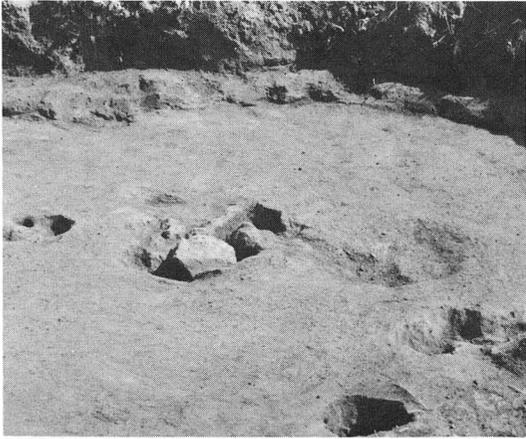
(宮坂光昭)



遺跡全景（南方より、背後の山は永明寺山）



川久保川の谷（開設されたスポーツ公園道路と○印川久保古墳位置）



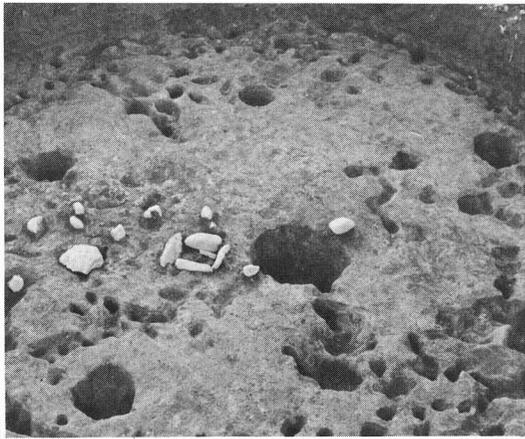
第1号住居址



第1号住居址上層の配石と土器出土状態



第1号住居址地床炉上の土器出土状態



第2号住居址



第3号住居址



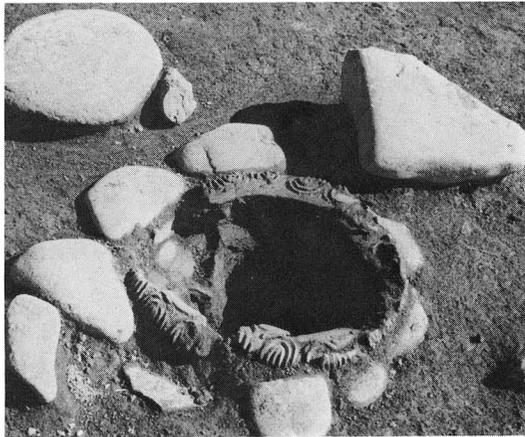
第3号住居址土器出土状態



第4号住居址炉址と配石



第5号住居址



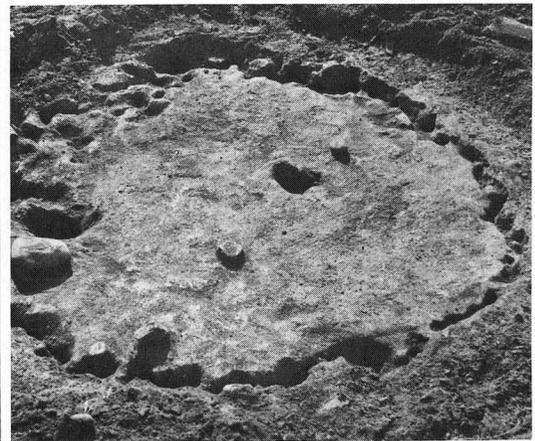
第5号住居址埋葬



第6号住居址



第6号住居址磨石斧出土状態



第7号住居址



第 8 号住居址



第 9 号住居址



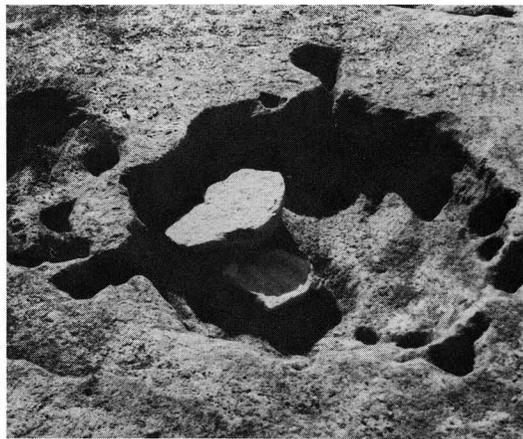
第 10 号住居址



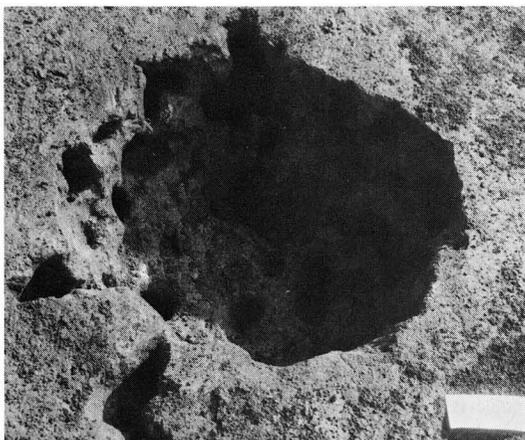
第 10 号住居址土器出土状態



ピット 1 号



ピット 2 号



ピット 3号



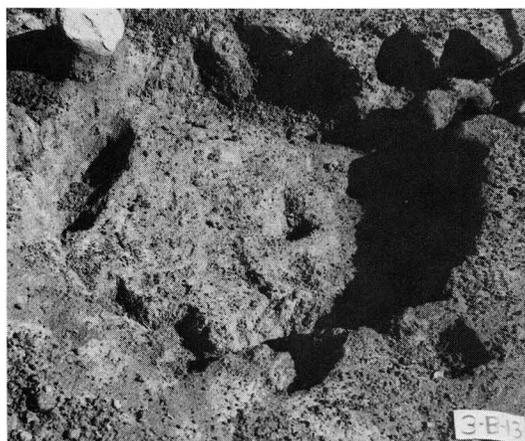
ピット 4号



ピット 5号



ピット 6号



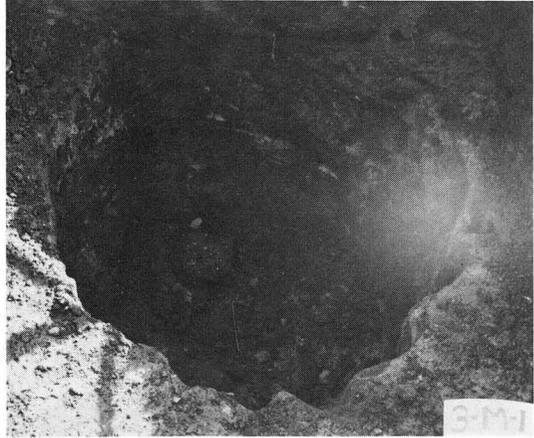
ピット 7号



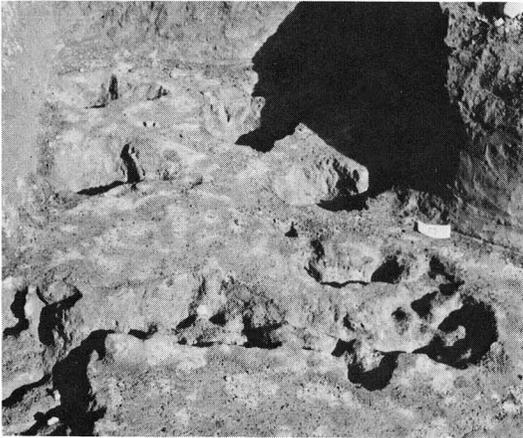
ピット 8号



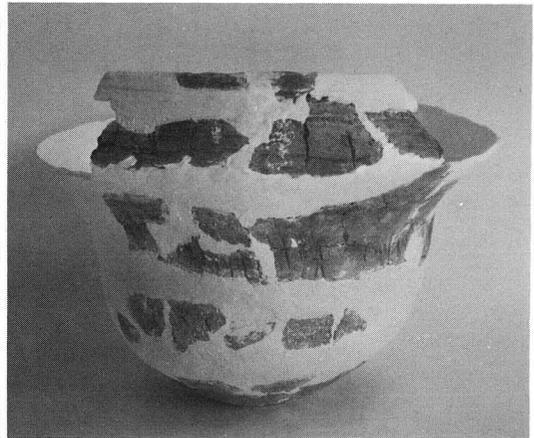
ピット 10号



ピット 11号



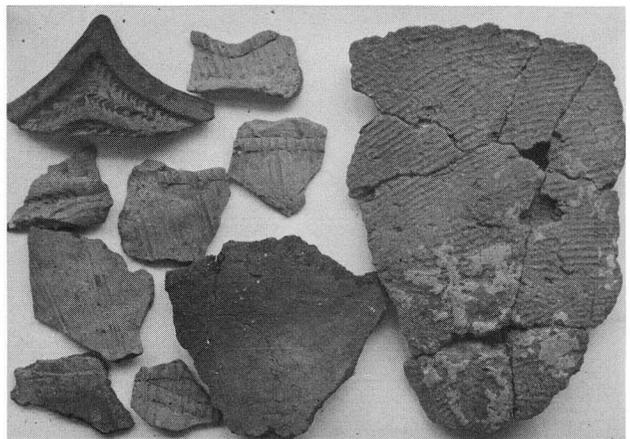
ピット 13・14・15号



第1号住居址出土土器



第1区独立土器



縄文早期末～前期初頭土器



第7号住居址出土土器



第1区独立土器



第5号住居址埋藏土器



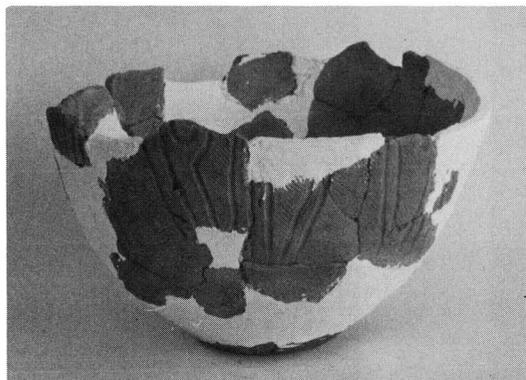
第1区单独出土土器



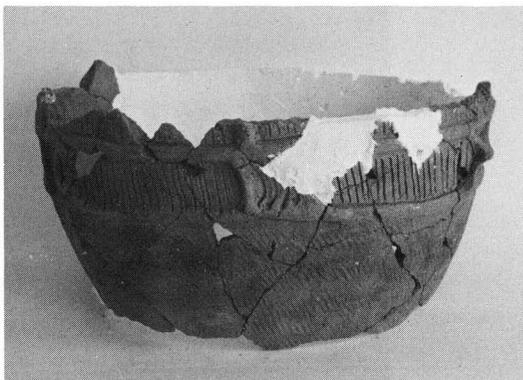
第1区独立土器



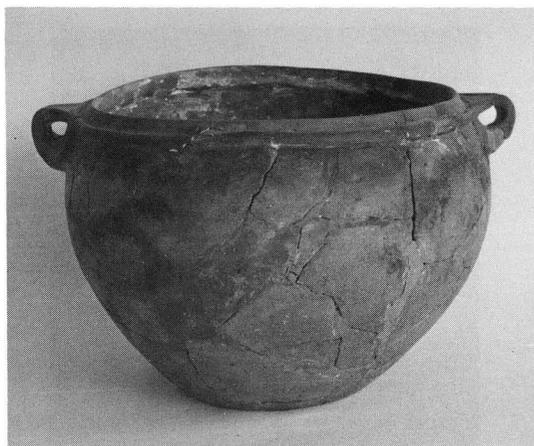
第3号住居址出土土器



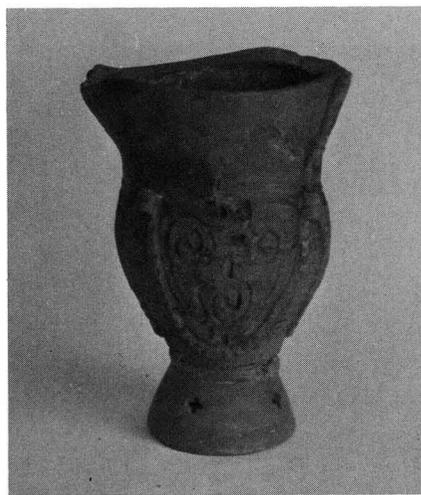
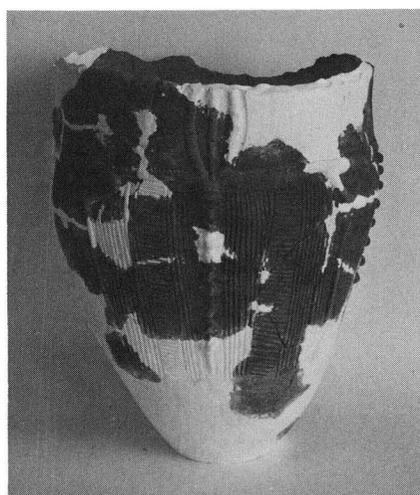
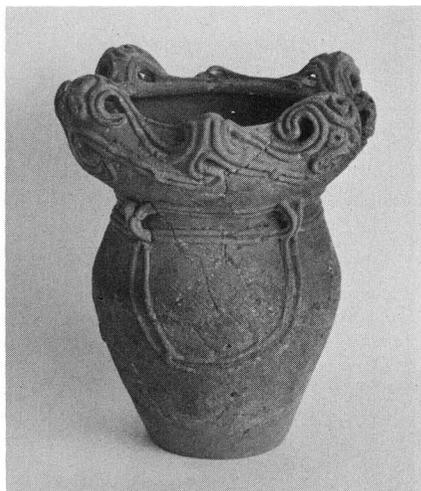
第1区出土繩文後期土器



第3号住居址出土土器



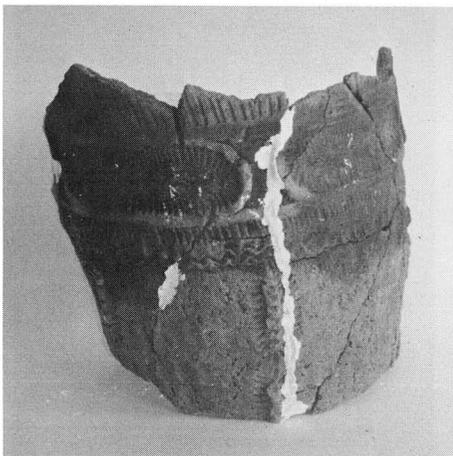
第10号住居址出土土器



第10号住居址出土土器



第10号住居址出土土器



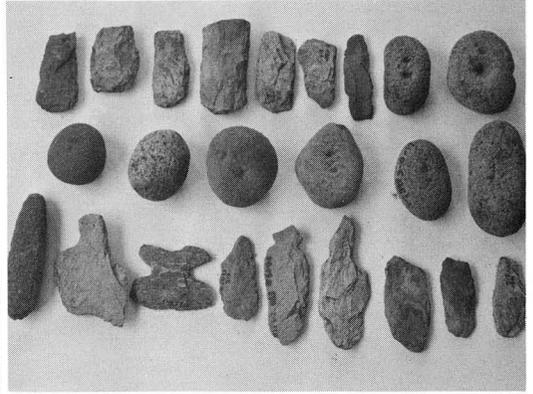
第10号住居址埋裏



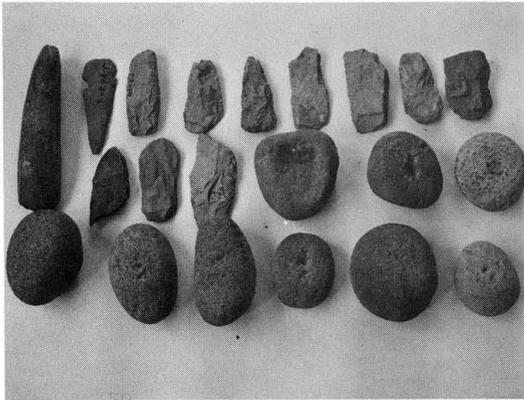
ピット10号出土土器



第2号·3号住居址出土石器



第4号·5号住居址出土石器



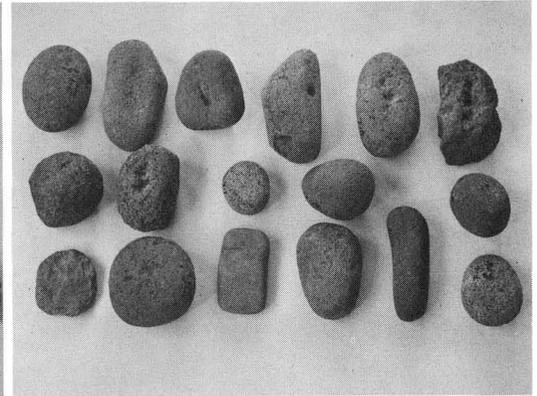
第6号住居址出土石器



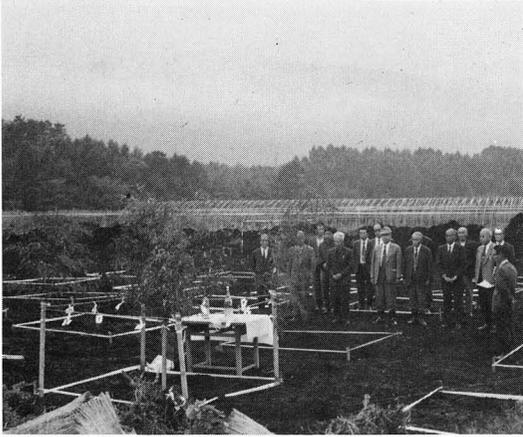
第1号·8号·10号住居址出土石器



第3区出土石器



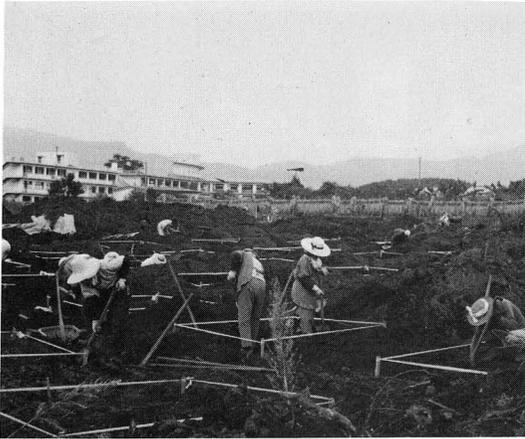
凹石·磨石



鍬入式



鍬入式（原田茅野市長）



発掘作業



第2号住居址発掘作業



宮坂尖石考古館長最後の視察



教育委員会の視察



川久保古墳遠景（長峰中学校側から）



石槨西側トレンチ



石槨北側トレンチ

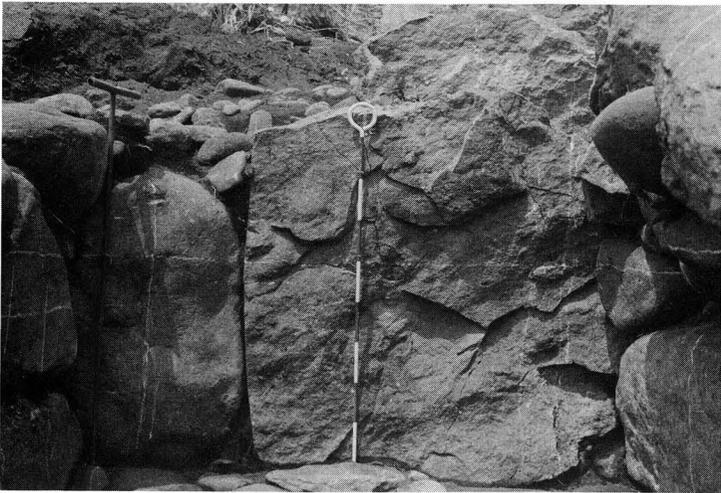
上方からの石室

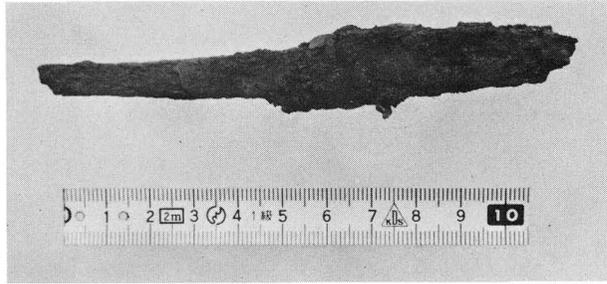


石室内部

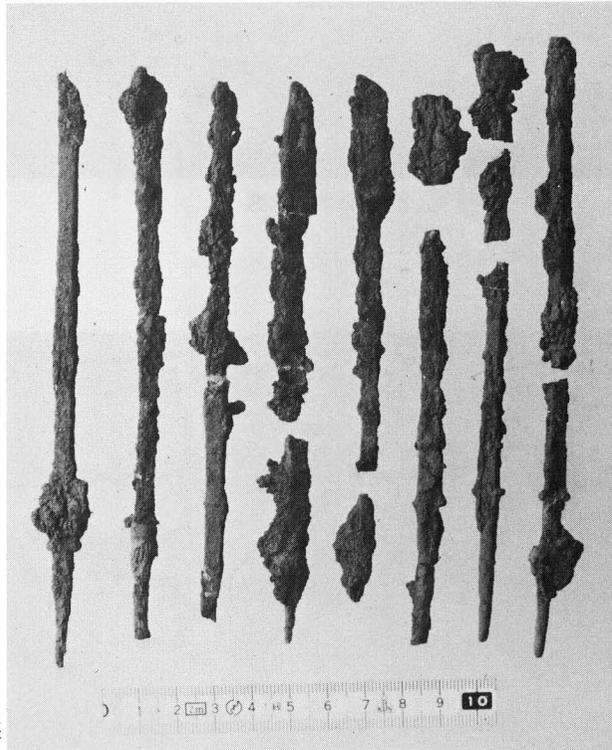


石室鏡石

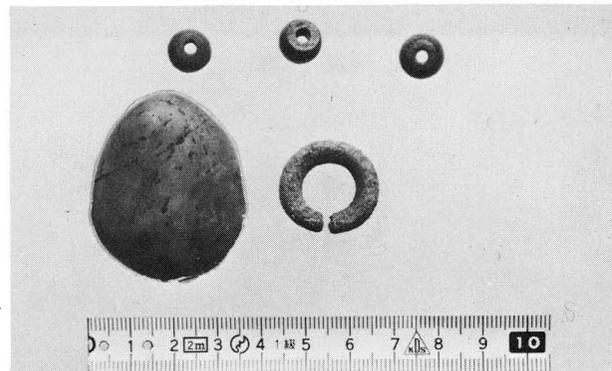




刀子



鉄鋌



丸玉  
瑪瑙原石  
耳環



発掘前の状態



発掘の状況

---

下ノ原遺跡  
川久保古墳 (非売品)

昭和50年3月15日 印刷

昭和50年3月20日 発行

発行所 長野県茅野市ちの4104番地  
茅野市教育委員会

印刷所 長野県岡谷市川岸108番地  
株式会社中央印刷

---

100

100

100

100

100

100

100

100

100

100